

# **新方遺跡発掘調査概要**

# **居住遺跡発掘調査概要**

1984

神戸市教育委員会

### 正 誤 表

		誤	正
P. 1	14行目	1077. 3	1977. 3
P. 4	30行目	「埋蔵文化財発振調査の記録」	「埋蔵文化財発掘調査の記録」
	33行目	～、昭和 <u>54</u> 年度調査により～	～、昭和 <u>58</u> 年度調査により～
P. 8	10行目	第V時代	第V様式
P. 12	9行目	～調整様に仕上げている。～	～調整様に仕上げている。～
P. 18	12行目	～、天井部が平坦で～	～、天井部が平坦で～

しんぼう  
新方遺跡発掘調査概要

1984

神戸市教育委員会

## 序

神戸市内の開発行為は、市街地の再開発と周辺の大規模造成という二面をもっています。しかし、最近では周辺地域の小規模な開発も進み、ことに明石川流域におけるそれは著しい情況にあります。

明石川流域は、市内で最も遺跡の密集している地域であり、播磨吉田遺跡、吉田南遺跡など著名な遺跡も数多く存在しています。

ここに報告いたします新方、居住両遺跡も明石川下流の遺跡であります。ともに発掘調査面積は狭小であります。その内容にみるべきものがあり概要ではありますが、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、両遺跡の発掘調査に御協力下さいました関係者各位に御礼申し上げます。

昭和59年3月

神戸市教育委員会

教育長 山本治郎



## 例　　言

- 1 本書は、神戸市西区玉津町、伊川谷町に所在する「新方遺跡」の発掘調査概要である。
- 2 今回の発掘調査は、神戸市西区玉津町高津橋字丁の坪121-1 130-1において実施したものである。
- 3 発掘調査は、土地所有者の西海利明、西海操両氏の委託を受け、神戸市教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査期間は、昭和57年8月1日～同年9月7日である。
- 5 調査にあたり、神戸市西農業協同組合、株式会社伊吹工務店の協力を得た。
- 6 発掘調査および本書の作成は、神戸市教育委員会文化財課学芸員 丸山潔が担当した。
- 7 補助員 田中耕司 整理員 輔中千枝、天沼千野、中嶋三恵子、藤井照子、山中總美

## 本 文 目 次

例言	
I.はじめに	1
II.周辺の弥生遺跡	2
III.調査概要	6
1. 遺構	7
弥生時代第Ⅱ様式	7
弥生時代第Ⅲ、Ⅳ様式	7
弥生時代第V様式	8
古墳時代6世紀前半	9
古墳時代6世紀後半	9
2. 遺物	10
A. 土器類	10
弥生時代第Ⅱ様式	10
弥生時代第Ⅲ、Ⅵ様式	10
弥生時代第V様式	12
古墳時代6世紀前半	16
B. 石器類	18
C. 玉類	20
D. 金属器	21
IV.まとめ	25

## 挿 図 目 次

図1 最近の調査地点	1
図2 周辺の弥生遺跡分布図	5
図3 時期別遺構配置図	6
図4 SB04実測図	7
図5 SB03、SK01実測図	8
図6 SB01実測図	9
図7 弥生土器実測図	13
図8 弥生土器実測図	14
図9 弥生土器実測図	15
図10 弥生土器実測図	16
図11 須恵器、土師器実測図	17
図12 石鎚、石錐、石匙、楔形石器 実測図	22
図13 太形蛤刃石斧、石庖丁、砾石 実測図	23
図14 小型石斧、玉類、銅鏡実測図	24
写真1 弥生土器第Ⅳ様式	12
写真2 片刃石斧	19
写真3 太形蛤刃石斧	19
写真4 石庖丁、砾石	20
写真5 玉類製品、未製品	21
写真6 銅鏡	21
写真7 昭和55年度丁の坪地点出土 弥生土器	21

## I. はじめに

当遺跡は、山陽新幹線敷設に伴う分布調査によって、その存在が確認された遺跡である。昭和45年度工事に先立ち実施された発掘調査では、弥生時代中期初頭から鎌倉時代の遺物が多量に出土し注目された。<sup>(1)</sup>

その後、国庫補助金を得ての範囲確認調査や民間企業の小規模開発に伴う発掘調査が実施されてきた。<sup>(2)</sup> 調査の回数を重ねる毎に当遺跡が大規模かつ重要な遺跡であることがその都度確認されてきた。

殊に昭和55年度の調査（丁の坪地点）で出土した弥生時代中期（第Ⅲ様式古）の貼石を有する円形周溝墓は稀有名な存在で、その周溝内からは高さ90cmに達する壺形土器2個体をはじめ、多量の土器が出土している。<sup>(3)</sup>

また、昭和57年度に実施した調査（大日地点）では、古墳時代後期（6世紀初頭）の玉造工房址とそれに伴う多量の管玉、小玉、勾玉の未製品が出土している。<sup>(4)</sup>

- 1 田中達夫他 「新方遺跡」 兵庫県文化財調査報告3 1971. 3
- 2 喜谷美宣他 「新方遺跡発掘調査概要」 神戸市教育委員会 1077. 3
- 3 神戸市立考古館 「地下にねむる神戸の歴史展——発掘現場からの報告  
——」 1980. 10
- 4 神戸市教育委員会 「新方遺跡現地説明会資料」 1982. 7

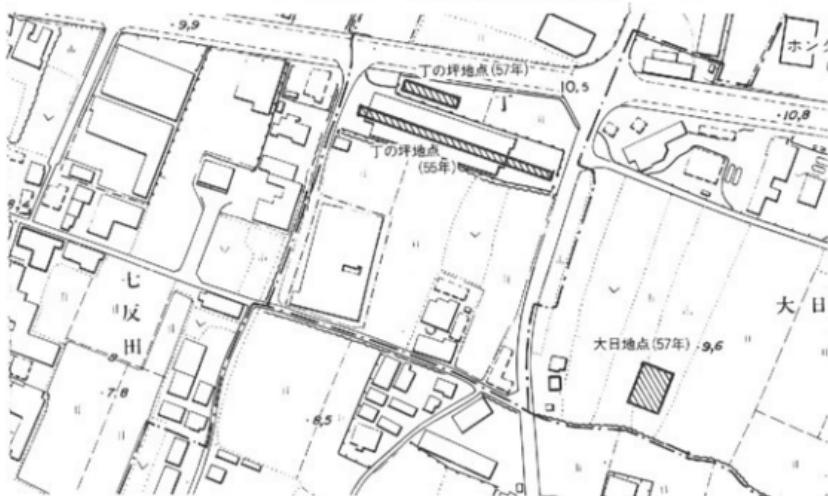


図1 最近の調査地点(1/2500)

## II. 周辺の弥生遺跡

明石川は、神戸市西区押部谷町に源を発し、総延長19kmで、伊川、伊谷川と合流し瀬戸内海に流入する。その中・下流域は、阪神間でも有数の遺跡密集地で、調査例も多く著名な遺跡が散在する。（文中の遺跡名の頭番号は、分布地図中の番号と対応する。）

### 第Ⅰ様式

明石川河口より2km上流西岸の中位段丘上に近畿地方で最も古い弥生遺跡の一つとされる**1吉田遺跡**、その南800mに**2片山遺跡**（古段階）が存在する。それに続く時期のものに**3新方遺跡**、**4大歳山遺跡**、**5西戸田遺跡**（いずれも中段階）が存在する。分布の点からいえば、吉田遺跡が母村となり、周辺地域に分村していった様が写されたように見えるが、吉田遺跡は中世の枝吉城築造に伴い弥生時代の生活面は破壊されていたようで、遺跡の規模、存続期間等が明確でない。それに比し、当新方遺跡は時代により盛衰はあるものの、以後鎌倉時代まで連続と生活が営まれ、明石川流域の中核になっていたと考えられる。  
 新段階になると遺跡は、**6今津遺跡**、**7居住遺跡**、**8田中遺跡**、**9常本遺跡**、**10南別府遺跡**などのように上流へ遡る。遺跡数の急増は、生産力の安定による人口増加の解消や、生産技術の向上があったためであろう。<sup>(5)</sup>

### 第Ⅱ様式

この時期に開始される遺跡は、先の第Ⅰ様式に比し、すこぶる低調で、**11青谷遺跡**、**12西神第89号遺跡**のみである。これらは、いずれも水田面との比高約70mの丘陵上に立地し、その規模は極めて貧弱なものである。しかし、この二遺跡は第Ⅳ様式になると、後述する他の丘陵上の遺跡とともに盛期を迎える。

### 第Ⅲ様式

この時期に開始されるものは、わずかに**13居住・小山遺跡**のみである。今後発見されるととも、その数はわずかであろう。

第Ⅰ様式の発展ぶりに比べ、第Ⅱ・Ⅲ様式の低調さは、おそらく可耕地の限界によるものであろう。第Ⅱ様式において、新集落が丘陵上に上るものおそらくそれに関連するのではないか。

### 第Ⅳ様式

この時期に入ると再び新集落の成立が活発になるが、それらの大部分は丘陵上に立地する。**11青谷遺跡**（比高70m）、**12西神第89号遺跡**（同64m）、**14養田中の池遺跡**（同38m）、**15西神第65号遺跡**（同68m）、**16如意寺裏山遺跡**（同67m）、**17池上ロノ池遺跡**（同30m）、**18頭高山遺跡**（同74m）などである。そして、ことごとく第Ⅳ様式の内に駆逐してしまう。

この時期の丘陵上の遺跡の特徴として戦闘的な性格が考えられているが、その根柢の一つである石鎌の長大化・多量化は、上記7遺跡すべての共通点ではない。しかし、石砲弾の出土が極めて稀で、西神第89号遺跡、池上口ノ池遺跡の各1点のみで、非農耕的集落であるといえよう。そして、以下の四遺跡から磨製石剣が出土している。養田中の池遺跡（銅剣型）、池上口ノ池遺跡（鉄剣型）、頭高山遺跡<sup>(10)</sup>（鉄剣型3）、青谷遺跡（鉄剣型、石戈）である。

非農耕的で、闘争・権力の象徴であろう武器型祭器を有する集落は、やはり戦闘的集落なのであろうか。

丘陵上の集落に比べ、その数は著しく少ないが、平地にも新集落は誕生している。<sup>(11)</sup> 19繁田川遺跡、20北別府遺跡などである。

先にも記したように、第Ⅳ様式に成立した新集落は、全く第Ⅴ様式に継続しなかった。例外として、池上口ノ池遺跡では庄内期に再び集落を形成している。

#### 第V様式

この時期に成立する新集落は、その立地を低地あるいは比高差の少ない段丘上に求めている。<sup>(12)</sup> 21養田遺跡、22大畠遺跡、<sup>(13)</sup> 23森友遺跡、24吉田南遺跡、<sup>(14)</sup> 25高津橋岡遺跡などで、これらの遺跡の成立とともに明石川流域では丘陵上の集落は姿を消している。

また、第Ⅰ様式に成立し、中期全般を通じて大規模化し得なかった大歳山、西戸田、常本、南別府などの各遺跡が再び動きを取り戻しているようである。これは、第Ⅳ様式の急激な増加、消滅とかかわりがあると考えられる。

#### 墓 址

各時期別にその変遷を追う得る程確認されていない。

第Ⅰ様式では、9常本遺跡の土壙墓が知られている。住居址とは約10m隔っているだけで、集落内に存在する。

第Ⅱ・Ⅲ様式では、3新方遺跡の円形、方形周溝墓、木棺墓が知られている。

第Ⅳ様式には様々な形態のものが知られている。<sup>(15)</sup> 26西神第47号遺跡では、丘陵尾根に木棺墓を中心に二群の土壙墓群が形成されている。<sup>(16)</sup> 27西神第42号遺跡、<sup>(17)</sup> 28鬼神山遺跡では土器棺が単独出土している。また<sup>(18)</sup> 29西神第40号遺跡では、尾根の先端部に二基の方形台状墓が隣接して築かれている。以上のように類例は少ないが、集落内に墓が築かれるものはない。

第Ⅴ様式では、その例は知られていないが末期から古墳時代にかけてのものとして、30榮墳墓が存在する。土器棺が出土しているが詳細は不明である。

- 1 小林行雄、直良信夫 「播磨吉田史前遺跡研究」 『考古学』 第3巻第5号 1932. 5
- 2 喜谷美宣他 「新方遺跡発掘調査概要」 神戸市教育委員会 1977. 3
- 3 直良信夫 「大歳山遺跡」 『近畿古代文化叢考』 1943. 10

新方遺跡

- 4 神戸市教育委員会 「西戸田遺跡スライド会資料」 1982
- 5 神戸市教育委員会 「常本西ノ口遺跡現地説明会資料」 1978.12
- 6 赤松啓介 「神戸市垂水区青谷遺跡出土の石戈（1）——弥生社会流通経済の一試論——」 『考古学雑誌』 第59巻第3号 1973.12
- 7 中村善則、喜谷美宣 「養田中の池遺跡」 『日本考古学年報』 28 1977.4
- 8 喜谷美宣、真野修 「西神第65地点遺跡」 『日本古考古学年報』 27 1976.5
- 9 池上遺跡調査団 「口の池遺跡現地説明会資料」 1979.1
- 10 現在発掘調査中で、3口出土しているが、森本六爾 「日本青銅器時代地表」 1929 に石劍出土の記載がある。
- 11 中村善則、喜谷美宣 「繁田川遺跡」 『日本考古学年報』 28 1977.4
- 12 浅岡俊夫 「養田遺跡調査概報」 神戸市教育委員会 1972.3
- 13 神戸古代史研究会 「神戸古代史」 第1巻第5号 表紙カット
- 14 神戸市吉田片山遺跡発掘調査団 「吉田南遺跡現地説明会資料」 VI 1980.10
- 15 神戸市教育委員会 「高津橋岡遺跡現地説明会資料」 1980.4
- 16 喜谷美宣 「西神ニュータウン内の遺跡」 中間報告Ⅰ 神戸市 1972
- 17 16に同じ
- 18 直良信夫 「播磨で発見した合口甕棺の調査」 『考古学』 第1巻第1号 1930.1
- 19 16に同じ

その他の関係文献

兼康保明 「明石川流域の弥生遺跡」 (1.2) 『武陽史学』 5—1.2  
1971、1972

田辺昭三 「吉田郷土館歴史資料展示室のおり」 神戸市吉田財産区管理会  
1973

菅理 「明石川流域の考古学研究 現状と課題」 (1~4) 神戸古代史 1—  
1~5 1973、1974

田辺昭三 「玉津吉田・森友 歴史の足跡」 「埋蔵文化財発振調査の記録」  
『吉田・森友のあゆみ』 1978

神戸市立考古館・神戸市教育委員会 「地下にねむる神戸の歴史展」 1980

追記 校了後、文中8田中遺跡は、昭和54年度調査により前期前半に開始する遺跡  
であることが判明した旨、兵庫県教育委員会 山本三郎氏より教示を得た。

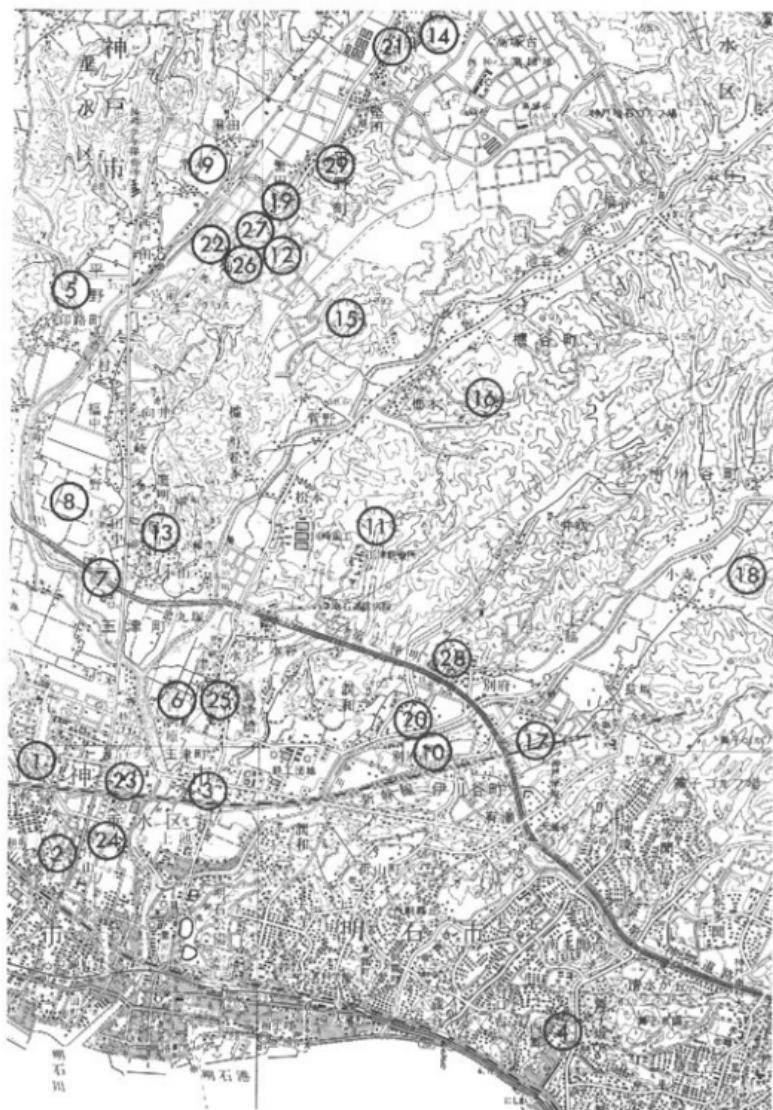


図2 周辺の弥生遺跡分布図(1/50,000)

### III 調査概要

今回の調査地点は、昭和55年度調査地点の北隣の水田である。調査トレンチは、幅4m、長さ25mで東西方向に設定した。

#### 自然河川

調査区の両端、すなわち東・西端は自然河川により各時代の造構面が削り去られている。この自然河川は、昭和55年度調査でも確認されているもので、現在当遺跡北方を流れる天井川の旧流路と考えられる。河川内の堆積土からは、弥生土器をはじめ、古墳、奈良、平安時代の遺物が出土する。

#### 層位

調査地区内の層位は、現水田下に、2~3面の水田址が存在する。しかし、いずれの水田面もその造営年代を明確にし得る遺物の出土はなかった。

現地表下1.1mで古墳時代後期（6世紀後半）の造構面に達する。それ以下に同じく古墳時代後期（6世紀前半）、弥生時代後期（第V様式）、同中期（第Ⅲ~Ⅳ様式）、同中期初頭（第Ⅱ様式）の造構面が存在する。最下層の第Ⅱ様式の造構面は、現地表下2.0mである。

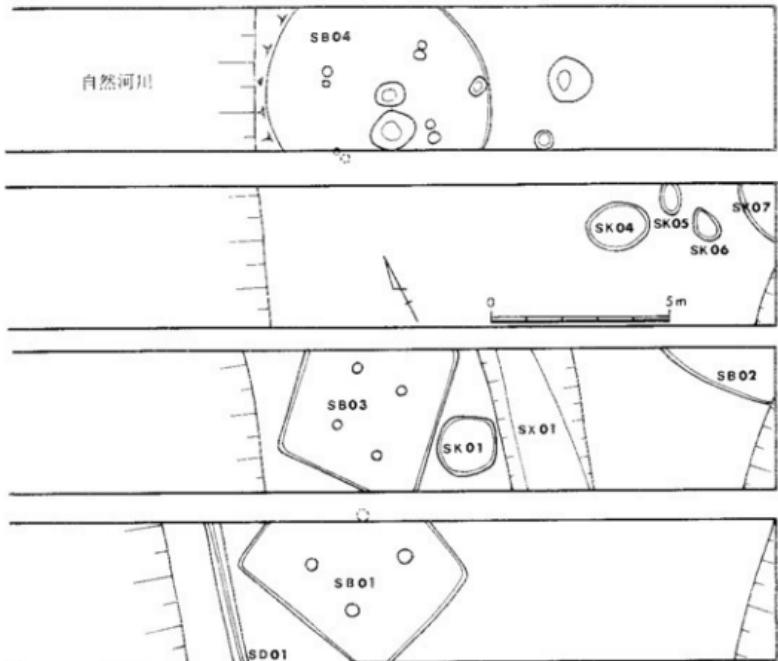


図3 時期別造構配置図

## 1. 遺構

**弥生時代**

**第Ⅱ様式** 今回調査区域の最下層に存在するもので、青灰色粗砂層をベースに遺構が構築されている。出土遺構は、円形竪穴住居址（SB04）、土塙（SK08）およびピット多数である。

**SB04** 住居址西側は、自然河川により削り去られているが、直径6.5m程度の円形である。周壁はほとんど残存せず、わずかに幅約15cm、深さ15~20cmの周壁溝が巡る。

住居址内には、径15~30cm、深さ10~75cmのピットが75個、土塙が2基存在した。これらのピットを検討すると、60cm以上のものが規則的な配置で抽出される。すなわち、4本柱の建物が一度建て替えられたという形である。したがって、土塙2基もそれぞれの時期の中央ピットとして存在したものと考えられる。しかし、その前後関係は、切り合いもなく、検出面も同一であるため不明である。また、他の多くのピットの性格も不明である。中央ピットと考えられる2基の土塙の埋土は、ほとんどが灰灰の層である。

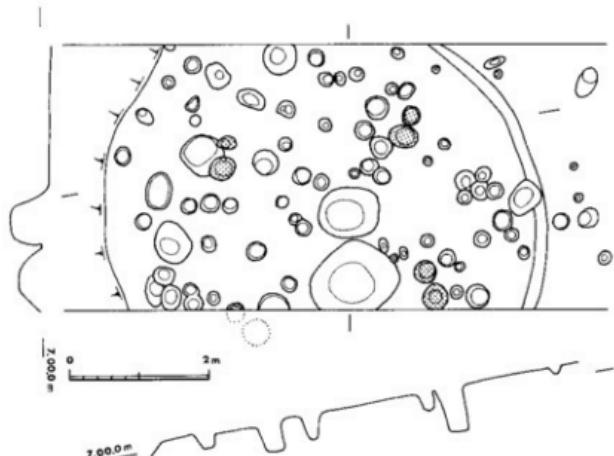


図4 SB 04実測図

**弥生時代**

第Ⅱ様式の遺構面上に堆積した無遺物層をベースに遺構が構築されている。

**第Ⅲ様式**

検出された遺構は、土塙（SK04~07・09）および土器群である。土塙はすべて第Ⅳ様式のものであるが、同一面上で確認された土器は、第Ⅲ様式・第Ⅳ様式が混在する。

**SK04** 長径1.8m、短径1.4mの梢円形プランを呈し、深さは0.2mである。

**SK05** よろそ半分が調査地区外に存在するが、長径1.1m、短径0.6mの梢円形と推定される。深さは0.1mである。

### 新方遺跡

- SK06** 長径1.0m、短径0.7mの橢円形を呈し、深さ約0.1mである。
- SK07** 調査地区の東端、SB02の直下で検出されたもので、径1.8m程度の円形と推定される。深さは0.2mである。
- 土器群** 遺構内に存在するものではないが、土器片が帶状になりSK04~07周辺で検出された。どのような意図のもとに、これらが敷き並べられたのか、あるいは破棄されたのか明確にできないが、出土土器の大部分が壺・高杯・鉢・台付鉢型土器などで、祭祀に関連するものではないかと想像させる。
- 弥生時代** 弥生時代中期の遺物包含層をベースに遺構が構築されている。出土遺構は、  
**第V時代** 円形整穴住居址（SB02）、長方形整穴住居址（SB03）、土壤（SK01）、溝状遺構（SX01）である。
- SB02** 調査地区東端でわずかに検出されたもので、その全容は推定の域を出ないが、径4.5~5.5mの円形で、壁高は0.2m、周壁溝は幅0.15m、深さ0.1mである。
- SB03** 一辺4.2m×4.6mの長方形を呈し、現存の壁高は0.45mを測る。周壁溝は存在しない。柱穴は4個検出されたが、その配置は平行四辺形で、柱間は1.4mと2.2mである。
- SK01** 長径1.6m、短径1.7m、深さ0.4mの不整円形の土壤である。埋土は、多量の灰、焼土を含んでいるが、壁面に焼けた痕跡はない。
- SX01** 調査地区的長辺に直交する形、すなわち南北方向に検出された2.4~2.6m、深さ0.4m~0.7mの溝状の遺構である。この遺構の全容は推定すらできないが、埋土の状況からは、水の流れたあるいは水の淀んだ様子はみられない。

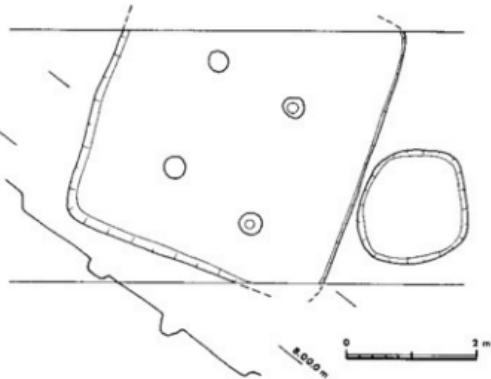


図5 SB03、SK01実測図

**古墳時代** 弥生時代後期の遺物包含層をベースに遺構が構築されている。出土遺構は、  
**6世紀前半** 方形竪穴住居址（SB01）、溝（SD01）である。

**SB01** 長辺5.0m、短辺3.9mの長方形プランを呈する。柱穴は3個確認され、その柱間は、周壁の短辺に平行するものが2.1m、長辺に平行するものが1.8mである。その位置関係から4本柱の建物と推定され、検出されなかった1個は調査範囲外に存在すると考えられる。中央よりやや西に偏する部分に焼土塊を含む土壤およびピットが検出され、いずれの壁面も焼けて赤化している。なお周壁溝と呼べるほどのものは存在しなかったが、部分的に周壁に沿って周囲よりくぼむ所もある。

**SD01** 幅40~50cm、深さ25~30cmで、埋土は暗灰色シルトである。底面のレベルは南するに従い下がる。

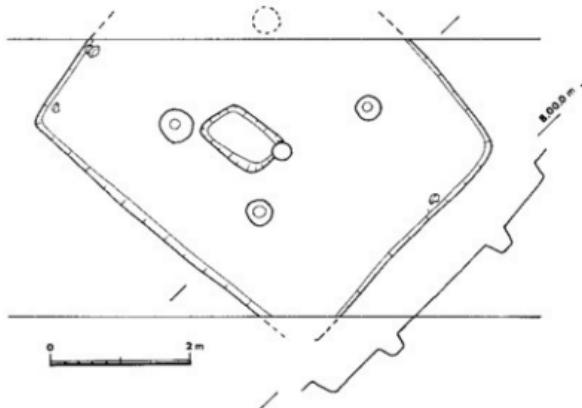


図6 SB01実測図

**古墳時代** 弥生時代後期の遺物包含層をベースに遺構が構築されている。検出された遺構  
**6世紀後半** は、幅20~30cm、深さ15~20cmの溝状遺構で3条存在し、それらは互いに結合  
 し、西方へとレベルを下げている。埋土は、いずれも黄褐色細砂で、一時に埋  
 没した様相を呈している。

## 2. 遺 物

### A. 土器類

土器類の出土は、遺構の数に比し概して少ない。時期的には弥生時代第Ⅲ～Ⅳ様式のものが多く、ここでは各遺構出土の主なものを中心に取り上げた。

弥生時代  
第Ⅱ様式

**SB04出土土器** (図7-1~4) (1)は、口径9.4cmの壺形土器で、頸部は細くしまる。口縁部内面は横なで調整を、頸部はなで調整を施す。外面は、口縁端部直下に7条一帯2単位の複帶構成の櫛描直線紋を、その下に櫛描波状紋、單帶構成の直線紋、波状紋を頸部下端まで空間なく繰り返している。

胎土中には、1～3%のチャート、石英粒が多量に、長石がわずかに含まれる。

(2)は、口径10.2cmで、頸部の太く短い壺形土器である。外面は刷毛目調整を、内面はなで調整を施している。口縁部内面は、本来横なで調整が施されるべきところであるが、横方向の刷毛目調整がみられる。胎土中には、1～3%の砂粒が多く含まれ、また赤色酸化土粒も含まれている。

(3)は、住居址内のピットから後述の銅鑼とともに出土したもので、口径20.0cm、器高18.1cmの鉢形土器である。外面は、口縁部直下から5条一帯2単位の複帶構成の櫛描直線紋を四帯巡らし、その間および下端に三角形列点紋、櫛描波状紋を施す。外面の下部および内面は、縱および横方向の丁寧な範磨きが施されている。胎土中には、1～3%の石英、チャート粒が多く含まれる。

紀伊産甕 (4)は、口径24.3cmの紀伊産の甕形土器である。頸部は横なで調整を、体部は横および右さがりの範削りを施している。胎土中には、結晶片岩が含まれている。

弥生時代  
第Ⅲ様式  
第Ⅳ様式

**SK04出土土器** (図7-5) 口径18.0cm、胸部最大径27.6cmの注口土器である。口縁部は内外面とも横なでが施され、浅い凹線紋が巡る。体部外面は、全面に丁寧な範磨き調整が施されている。焼成は、出土土器中最も堅緻なもの一つ。注口土器で、胎土中には1%以下のチャート粒がわずかに含まれ、赤色酸化土粒もみられる。第Ⅳ様式に属するものであろう。

**SK05出土土器** (図7-6) 口径14.3cm、底径11.6cm、器高14.1cmの器台形土器である。口縁部端の拡張された部分に3条、体部に6条、裾部に4条の凹線紋を巡らしている。また、口縁部端面の凹線紋上には相対する4ヶ所に、径1.2cmの大きな円形浮紋を配している。胸部から裾部にかかる部分には、円孔を相対する4ヶ所に配している。内面は、全面に範削り調整が施されている。第Ⅳ様式に属するものであろう。

**SK06出土土器** (図7-7) 底径16.5cm、現存高11.8cmの高埠形土器である。外面は、縱方向のみの丁寧な範磨きを施し、内面下半はなで調整を施している。

この時期のものによくみられる内面の箝削り調整はない。裾部近くに長径1.5cm、短径0.6cmの米粒形の透し孔が5ヵ所あけられている。

**SK07出土土器** (図7.8-8~11) (9) は、口径12.1cm、胴部最大径20.4cm器高31.5cmの壺形土器である。口縁部は、内外面ともに横なで調整を施し、口縁部端面直下に凹線紋を1条巡らす。頸部および体部上半は綫方向の刷毛目調整を、下半は箝削り調整を施す。内面はなで調整を施すが、部分的に刷毛目が見える。底部の厚みは、他の部分の器壁とかわらず薄い。

(10・11) は、接合する部分はないが、胎土、調整手法、焼成等から同一個体と考えられる台付鉢形土器である。口径13.2cm、復元器高約21.5cmを測る。口縁部内外面は、横なで調整を、体部上半は内外面とも横方向の箝磨き調整を下半外面は箝削り調整を、下半内面は綫ないしは斜め方向の箝磨き調整を、脚部は、外面全体と内面の下半に横なで調整を施している。

口縁部端面よりやや下った部分に4条の凹線紋を巡らし、その上を箝による刻み目で飾っている。脚部は、最上部および中位に各5条の箝描沈線紋をめぐらしている。なお鉢部の底は、円板充填法によるものである。

(8) は、底径14.2cm、現存高15.0cmの高环形土器である。脚部最上端に4綾杉紋条、中程に4条の箝描沈線紋を巡らしている。裾部には3条の箝描沈線紋を巡鋸齒紋らし、その間に綾杉紋、鋸齒紋を描いている。

調整は、外面では脚、環部とも全面に丁寧な箝磨き調整を、内面では脚部下半に箝削り調整を施し、上半は紋目を残す。なお、環部底は円板充填法によるものである。

(8~11) いずれも第IV様式に属するものであろう。

**土器群出土土器** (図8、9、10-12-22) (12) は、口径25.8cmの壺形土器である。外面は、綫方向の刷毛目調整を、内面は横方向の刷毛目調整ないしはなで調整を施している。

口縁部端面は大きく垂下させ、4条の凹線紋を巡らし、相対する四方向に2個一対の棒状浮紋を配している。口縁部内面の水平な部分には、外側に扇形紋を、内側には柳描波状紋を巡らしている。頸部には、断面三角形の凸帶と指頭圧痕紋凸帶を巡らし、全体に飾りたてた土器である。第III様式(新)に属するものであろう。

(13) は、口径18.6cmの壺形上器で、口縁端部は上下に肥厚させ、端面には3条の凹線紋を巡らしている。凹線紋上には5個一対の棒状浮紋を相対する四方向に配している。また、頸部にも3条の凹線紋を巡らす。体部上半は無紋で、内外面とも刷毛目調整が施されている。第IV様式に属するものであろう。

**各種紋様** (14) は、胴部最大径42.0cmの大型の壺形土器である。頸部以下に柳描直線紋、斜格子紋、円形浮紋、柳描波状紋を巡らす。上部にある円形浮紋は、間隔

をあける部分もある。なむ、施紋は上から順次行なわれ、最後に円形浮紋を貼付している。第Ⅲ様式に属するものであろう。

(15) は、(14) とほぼ同大の壺形土器である。頸部以下に柳描直線紋、扇形紋、斜格子紋、円形浮紋、柳描波状紋を巡らす。円形浮紋が貼付された内面には指おさえのくぼみが生じている。第Ⅲ様式に属するものであろう。

(16) は、口径12.4cm、胴部最大径18.1cm、器高31.4cmの壺形土器である。口縁部内外面は横なで調整を施し、外面のやや下った部分には浅い凹線紋を2条めぐらす。体部上半および頸部は粗い刷毛目調整を、下半は縱方向の範磨きを施す。内面は、細かい刷毛目原体でなで調整様に仕上げている。第Ⅳ様式であろう。同形態の(9)より後にするタイプと考えられる。

(17) は、口径22.3cm、器高15.3cmの鉢形土器である。口縁部内外面は横なで調整であるが、外面のそれは、口縁部下5cmにもおよぶ幅広いものである。体部外面は、範削り調整、内面は粗い刷毛目を施している。口縁端部直下に2条の凹線を巡らしている。第Ⅳ様式であろう。

(18) は、口径21.3cmの高壺形土器である。口縁部内外面は横なで調整を、それ以下には、内外面とも範磨き調整が施されている。部分的に刷毛目調整が残る。屈曲する部分の外面には、3条の凹線紋を巡らす。第Ⅳ様式に属する。

**大型高壺** (19) は、口径45.2cmの大型の高壺形土器である。口縁部内外面は横なで調整を、内面下半および外面は範磨き調整を施す。口縁端部は、内外方に肥厚させ、幅広の凹線紋を1条巡らす。なむ、内面の一部に2次の焼成がみられる。

**台付鉢** (20・21) は、ともに台付鉢形土器の脚部と考えられる。外面は、範描きで綾杉文、斜線紋などを描いている。最下段の三角形の邊し孔様のものは、内面に貫通せず窪でえぐり取っているだけである。第Ⅳ様式に属するものであろう。

(22) は、口径20.8cmの台付鉢形土器である。内外面ともに範磨き調整が施されている。口縁部は内傾し、やや下った部分から幅広の凹線紋が5条、脚部にも5条巡らされ、鉢部底は円板充填法による。第Ⅳ様式に属する。

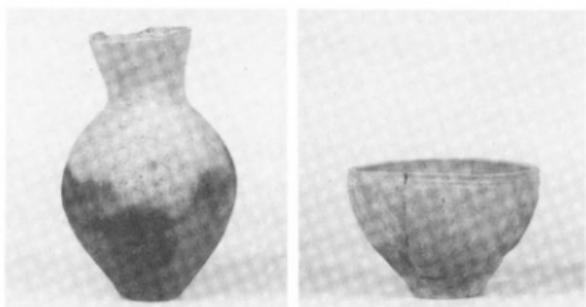


写真1 弥生土器第Ⅳ様式

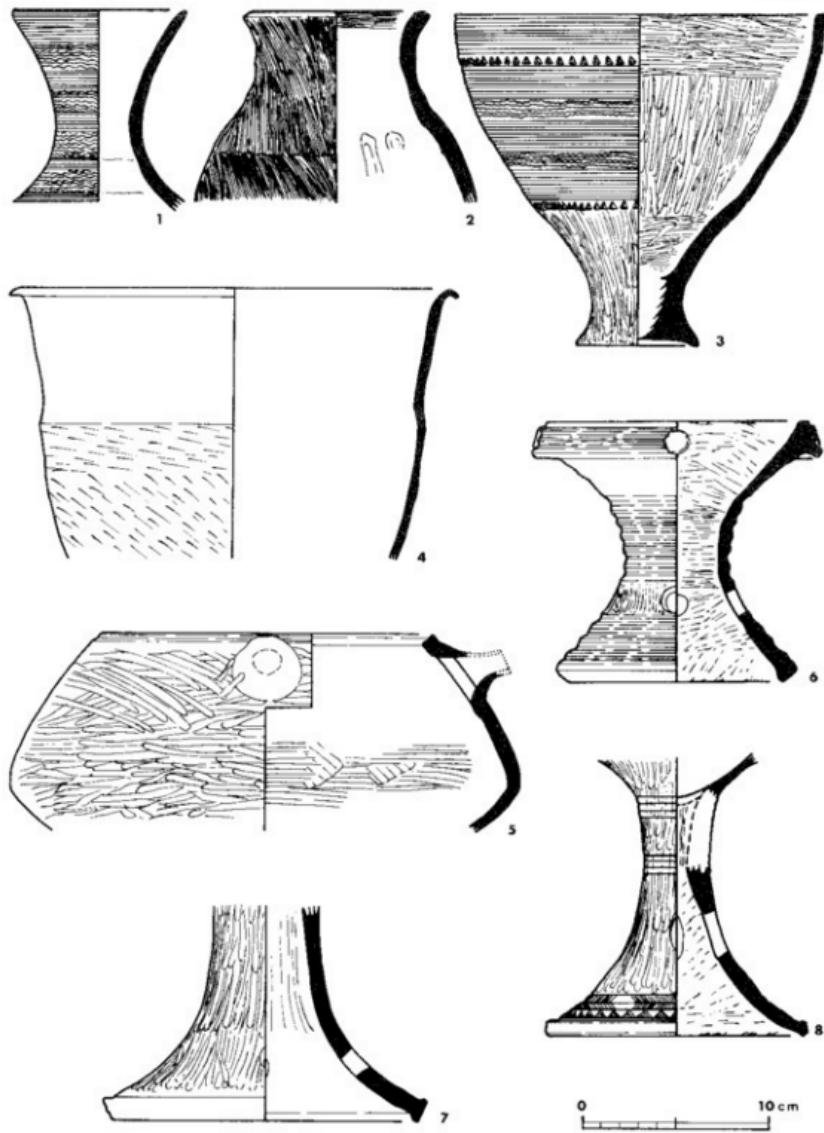


図7 弥生土器実測図（1～8）

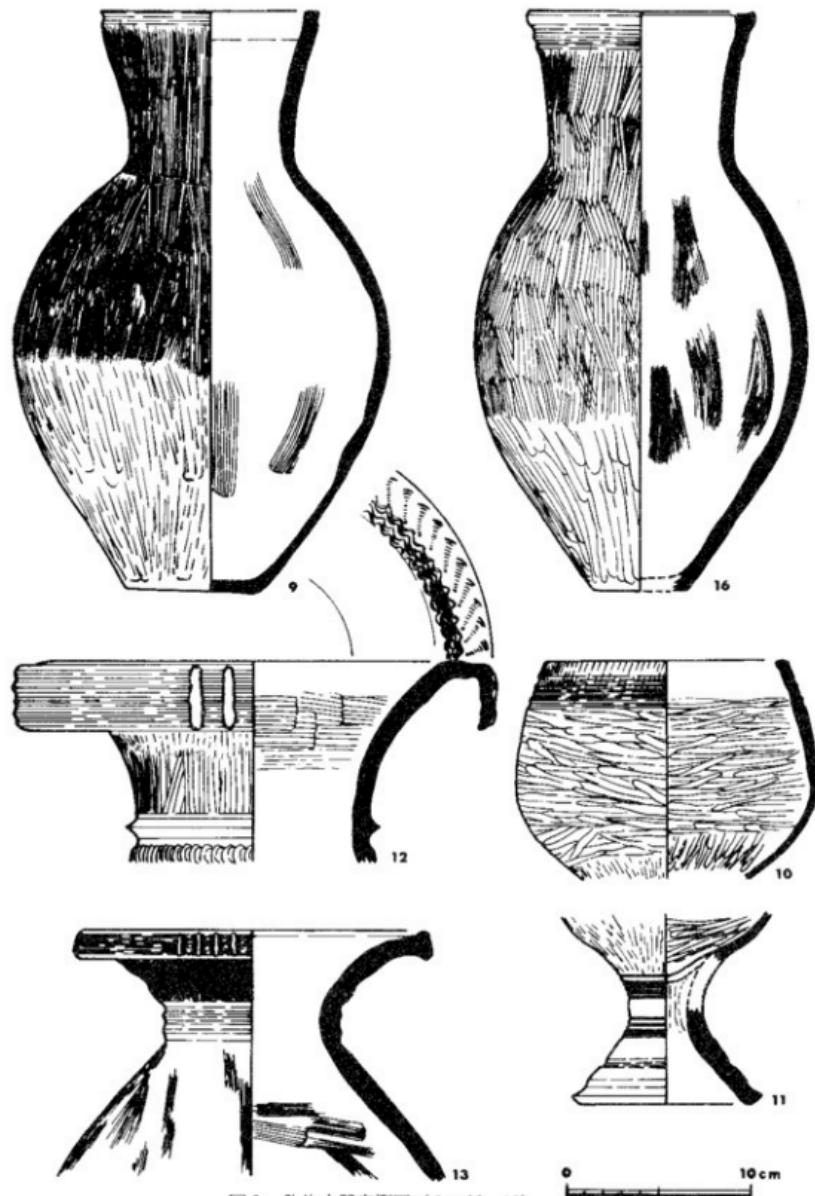


図8 弥生土器実測図（9～13、16）

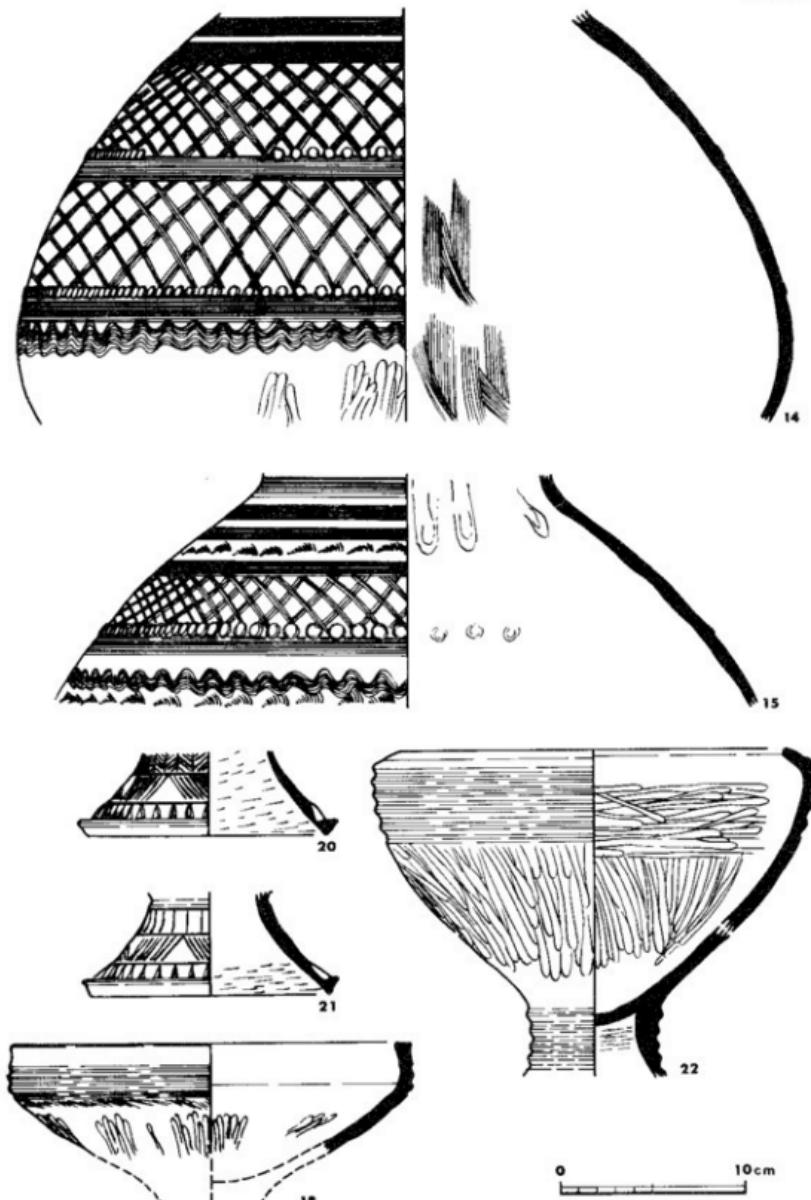


図9 弥生土器実測図 (14、15、18、20~22)

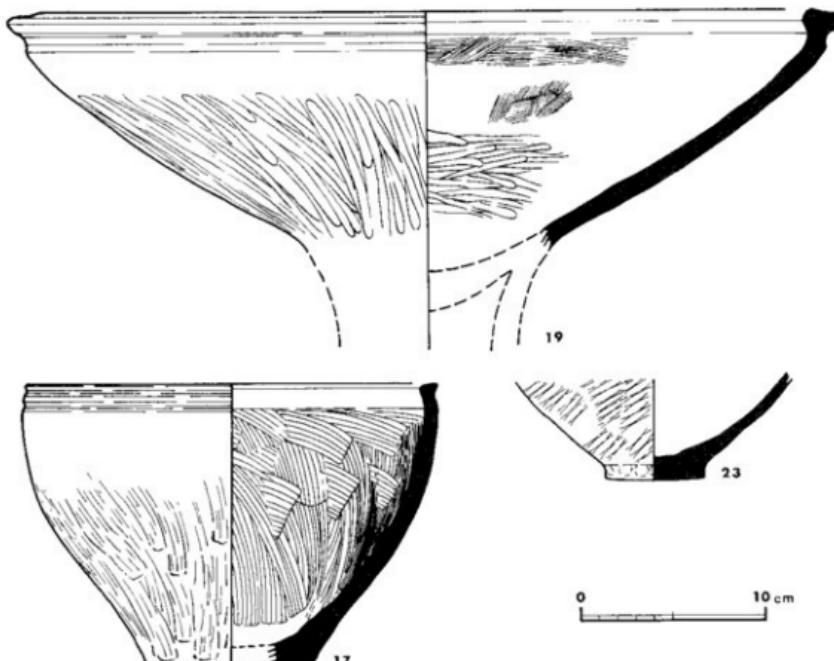


図10 弥生土器実測図 (17、19、23)

**弥生時代  
第V様式** SB03出土土器 (図10-23) 塗形土器底部で、外面は粗い叩き目、内面はなで調整を施している。

**古墳時代  
6世紀前半** SB01出土土器 (図11-1~3) (1) は、口径12.0cm、器高5.1cmの須恵器壺蓋である。肩部から口縁部にかけての内外面は横なで調整が施されており、天井部の箆削り調整は、肩部よりやや上った部分まで反時計まわりの方向で施されている。天井部内面中央には同心円紋の当て具痕が見えるがなで消している。口縁部端面は明晰な段をつくっている。胎土中には、1~3%の石英粒が多い量に含まれている。

(2) は、口径13.0cm、器高5.0cmで、調整方法は(1)とほぼ同様である。

(3) は、口径12.0cm、器高6.0cmの有蓋高壺の蓋である。調整手法は、(1・2)とほぼ同様で、天井部のつまみは中央で大きくぼむ。胎土中に2~6%の石英粒を多量に含み、内外面ともに凹凸が多い。陶邑編年MT15型式に属するものであろう。

**SD01出土土器** (図11—4～6) (4)は、口径22.8cmの須恵器甕で肩部以下を欠く。口縁部は横なで調整を施し、頸部以下は外面を平行叩き目、内面を同心円紋当て具で成形している。

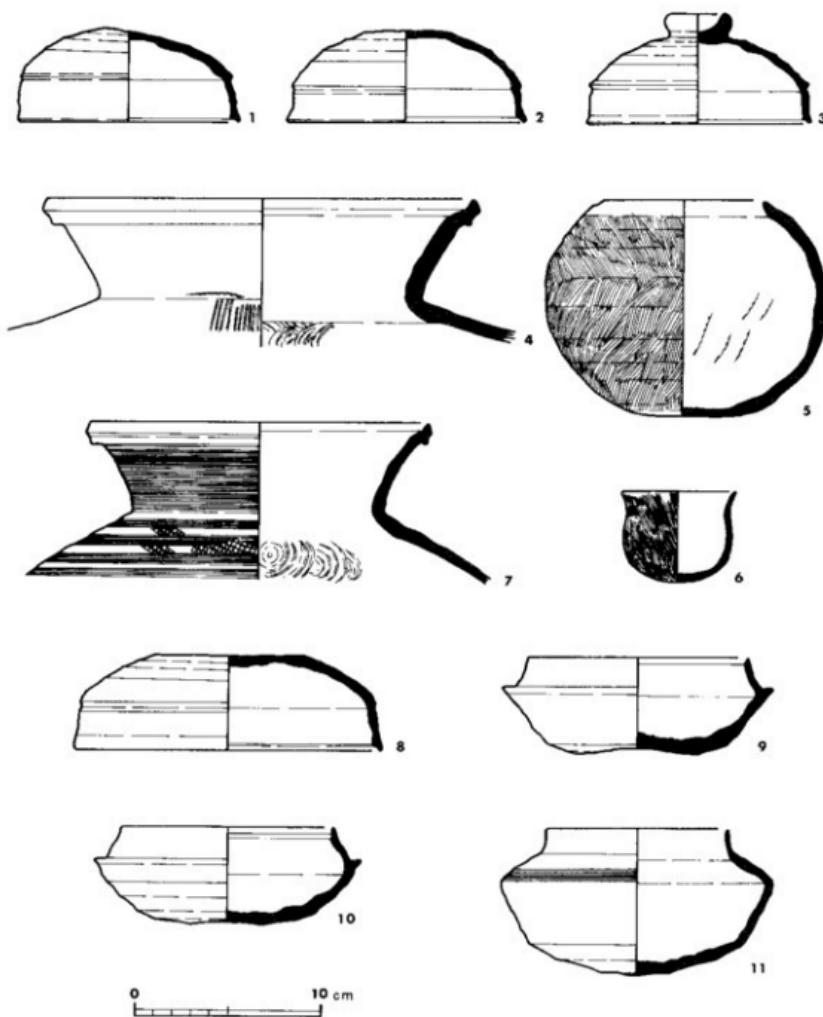


図11 須恵器、土師器実測図

(5) は、口径8.6cm、胴部最大径15.1cm、器高11.8cmの土師器盤である。成形は、径6cmの粘土円板で底部をつくり、その上に口縁部まで10帯の粘土紐を積みあげている。口縁部内外面とも横なで調整、体部外面は粗い刷毛目調整、内面は刷毛目調整の後なでている。体部上半に1ヶ所黒斑を有する。

(6) は、口径6.2cm、器高5.0cmの小型の土師器盤である。口縁部内面は横なで調整が施されているが、外面には及んでいない。体部外面は細かい刷毛目調整を、内面はなで調整を施している。体部の相対する2ヶ所に黒斑を有する。

**包含層出土土器** (図11—7~11) SB01、SD01の周辺から出土したものである。

(8) は、口径16.6cm、器高5.2cmの須恵器环蓋である。調整手法は、前述のSB01出土の环蓋と同様であるが、天井部が平坦で型式的には一時期あげられるものであろう。なお天井部外面には十文字のヘラ記号がみられる。

(10) は、口径11.4cm、器高5.4cm、(9) は、口径12.0cm、器高5.3cmの須恵器环身である。(10) は、外面の範削り調整が受け部のややドった部分まで施されているのに対し、(9) ではほぼ底面のみに施されている。また、口縁部端面の形状が(10) では明瞭な段がつけられているが、(9) はそれほど明瞭ではない。底部内面の同心円紋の当て具痕は、(10) ではなで消されているが、(9) ではそのまま残されている。

以上から、(9) はSD01と同時期に、(10) は一型式あがる(8) と同時期と考えられる。なお、(9) の底部外面には一文字のヘラ記号がみられる。

(11) は、口径9.8cm、器高8.0cmの須恵器短頸壺である。口頭部は、内外面とも横なで調整が、肩部にはカキ目が施されている。また、体部下半から底部にかけて範削り調整が施されている。

(7) は、口径18.2cmの須恵器甕で、口頭部は横なで調整が、頸部以外にはカキ目が施されている。肩部のカキ目は、幅1cm単位の帶状に施し、その間に叩き目をそのまま残している。

## B. 石器類

**石 鐵** (図12—1~4) いずれもSB04出土で、長さが3cmを越えるものである。いずれも表裏両面に大剝離面を残し、断面形は扁平な六角形を呈す。有茎式のものではなく、凸基無茎式(1・3)、平基無茎式(2・4)で、サスカイト製である。

**石 錐** (図12—5) 弥生時代第Ⅲ~Ⅵ様式に属するビット内から出土したものである。つまみ部は、両面に大剝離面を残し、周縁にのみ細部調整を施している。錐部は丁寧に細部調整が施され、断面図は菱形を呈す。先端部分は失われてい

て不明であるが、基部には使用痕は認められない。サスカイト製である。

#### 楔形石器

(図12-8・9) 表裏両面の細部調整は、さほど丁寧ではなく、上下の刃部は密接した段階状剝離によって形成されている。両側縁は裁断面を持ち、断面形は凸レンズ状である。他に数点出土しているが、いずれも弥生時代中期の包含層出土のものである。サスカイト製である。

#### 用途不明品

(図12・7) 表裏両面に大剝離面を残しながら、周縁は粗い調整が施されている。断面形は扁平な六角形で、石錐・石錐のどちらにも属さない形態である。SB04出土のもので、サスカイト製である。

#### 石庵丁

(図13-14) 半月形で刃部は直線をなす形態と考えられる。横方向のみの研磨痕がみられ、穿孔は両側から行なわれている。結晶片岩製である。他に小片が一点出土しているが形態は不明である。

#### 石斧

(図13-10~12、図14-15) (10) は、SB04出土で、表裏、両側、頂部の各面に敵打痕が多数みられる。この敵打痕は、硬く、鋭いものを打った際に生じた様で、細い溝状のくぼみの集合である。ほぼ全面に丁寧な研磨痕がみられ、刃部は鋭い。

(11) は、第II様式に属すると考えられるピットから、中央部にくぼみを有する台石とともに出土している。どの面にも全く敵打痕はないが、よく使用されて刃部には全く鋭きがみられない。

(12) は、折損しており、その後に他の目的で使用されたらしく、折損部周縁に敵打痕が連続してみられる。刃部は磨耗しており鋭さはみられない。中期の包含層出土である。

(15) は、片刃の小型品で、長さ34%、最大幅10%である。全面に丁寧な磨きが施されており、使用痕はみられない。石材は不明であるが、縦方向に節理が通っている。



写真2 片刀石斧(×1)

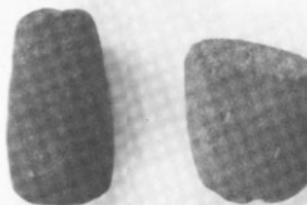


写真3 太形蛤刃石斧

## 砥 石

(図13—13) SB03出土で、長辺60%、短辺43%、厚さ41~58%で台形状を呈し、六面のうち五面までが細かい使用痕を残している。

また、SB04で、幅71%、長さ265%、厚さ38~51%の長方体の大型の砥石が出土している。その一面に浅いくぼみが何条も走っており、後述の玉未製品の出土と合わせて考えると、玉磨きの砥石ではないかと思われる。先のSB03出土のものとともに凝灰質砂岩であろう。

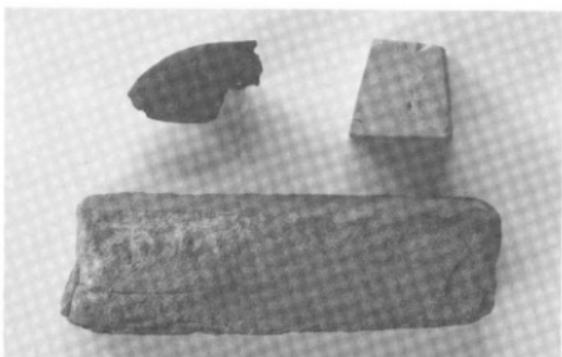


写真4 石庵丁、砥石

## C. 玉 類

完成品は1点のみで、他はすべて未製品ないしは原石である。出土した住居址(SB02、03、04)の埋土の一部を水洗したが、微細な剥片は出土していない。したがって、これらの住居址は、玉造工房址ではなく、玉造にかかわった人々の住居址ではないかと考えられる。

なお、石材については鑑定を受けていないので記すことはできないが、ほとんどが深緑色の光沢を有する硬質の石である。

管 玉 (図14—16~18) (16) はただ1点の完成品であるが半截している。長さ9%、径3.5%で、穿孔は両側から行なわれている。

(17) は径8%で、現存の厚みは2%である。穿孔は行なわれているが、断面形が八角形を呈しており、円形にする過程で破損したらしい。(16・17) いずれもSB03出土である。

(18) は、長さ12%、断面形8%×9%の直方体を呈している。面を整えるための磨きは、ほぼ全面に施されているが、打ち割りの際に生じた凹面はそのまま残っている。SB02出土である。

その他の未 製 品 (図14—19~23) すり切施溝を有するものがSB04から3点出土している。

(19) は、すり切り施溝が3条みられ、そのうち2条は、面と面が交わる部

分に存在する。したがって、この溝により切り離されたと考えられる。(20・21)は1条ずつ溝を有する。すり切り施溝を有する原石はある程度まで研磨が行なわれており、多くは研磨された面に溝が切られている。

(図14-22~23)は、いずれも不定形であるが研磨された面を有する。

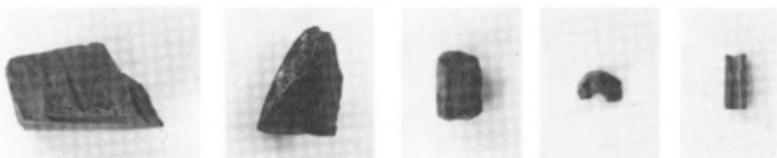


写真5 玉類製品、未製品 ( $\times 1$ )

#### D. 金属器

**銅 鐵** (図14-24) SB04内のピットから出土したものである。長さ38mm、最大幅12mmで、表裏とも凹凸が多く、また刃部も鋭さがみられないことから鑄造後研磨されていないようである。断面形は、扁平な菱形をしており、茎は円形である。出土時は赤銅色の光沢を有していたが、瞬時に茶褐色に変色した。

この銅鐵の時期については、出土時より問題にされたが、岡7-3の鉢形土器と伴出しており第Ⅱ様式に属することは間違いない。



写真6 銅鐵 ( $\times 1$ ) ▶

#### 写真7 昭和55年丁の坪地点出土弥生土器▼



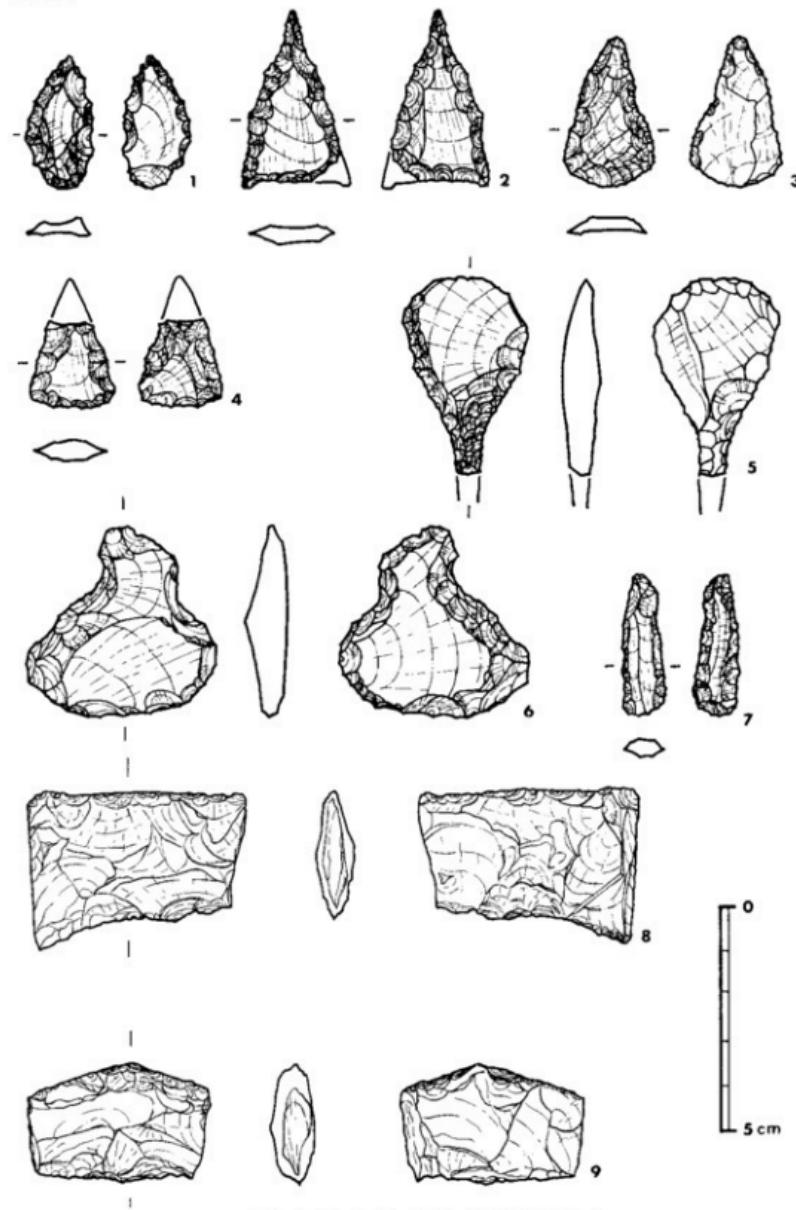


図12 石鎌、石錐、石匙、楔形石器実測図



圖13 太形蛤刃石斧、石庖丁、砸石實測圖

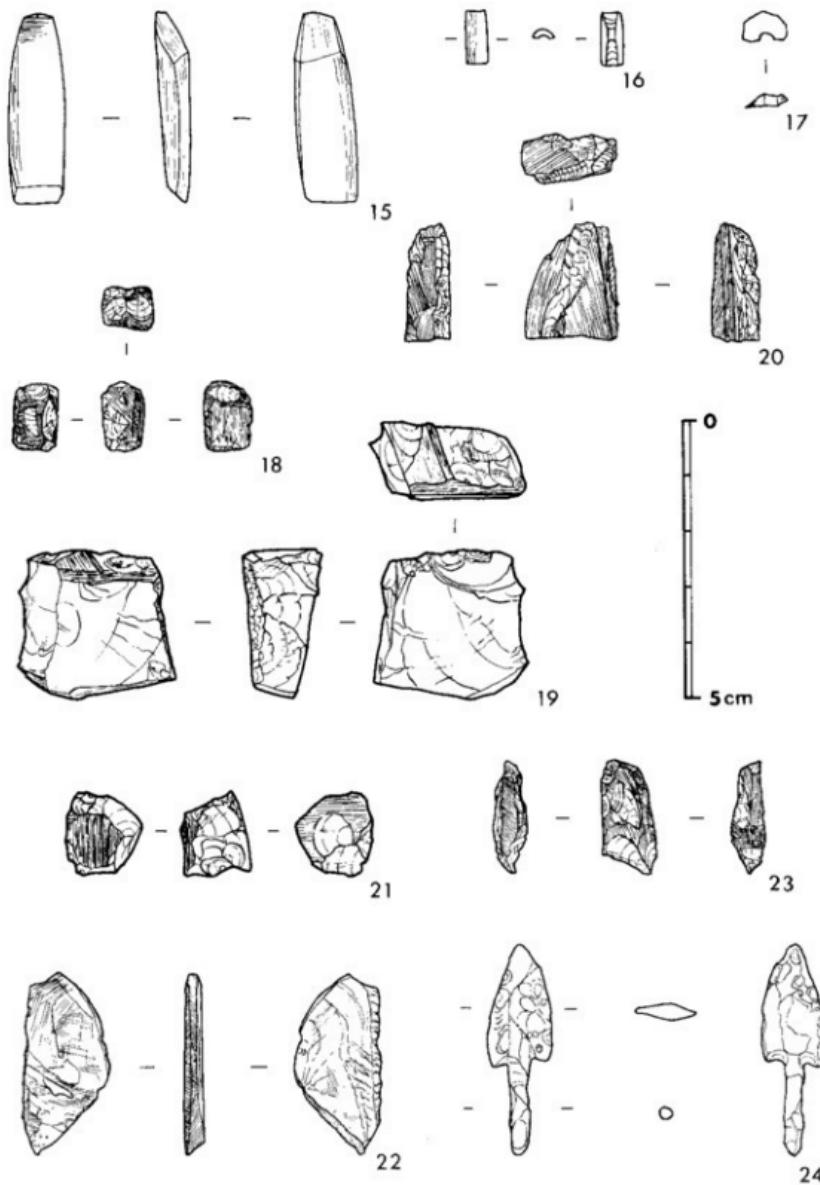


图14 小型石斧、玉類、銅鎛實測圖

## IV. ま と め

今回の発掘調査は、面積が狭少であったにもかかわらず、遺構、遺物とも多くの成果が得られた。これは、今日までの数度の発掘調査が物語っているように、当遺跡が非常に濃密な遺構の分布状況を持っていることと、明石川流域の中核をなす遺跡であることの表われであろう。

### 住居址

4棟の住居址を確認したが、そのうちの3棟(SB 01, 03, 04)までが、ほぼ直上・直下に位置している。この位置は、微高地の端ないしは河川の縁辺であり、何故にこのような場所に住居址が各時期に築かれたのか不明である。昭和57年度調査の大日地点で検出された住居址(弥生時代第Ⅱ様式、古墳時代後期)も微高地の縁辺に位置しており、また吉田南遺跡の古墳時代後期の住居址群も微高地の縁辺に位置しているようである。台地上の集落における住居址の多くがその縁辺に位置することが知られているが、それと同様の配置が低地においても行なわれていたのではないだろうか。神戸市内では低地における集落の完掘例は数少ないが、今後それら集落における住居址の配置については留意されるべきであろう。

### 土器群

遺構に伴わない多量の弥生時代中期(第Ⅲ～Ⅳ様式)の土器が出土し、これを土器群と称してきた。この土器群の性格を考える上で重要なのは、先述したように斐形土器が少なく、壺・高杯・鉢・台付鉢形土器がその主体を占めることである。また、当土器群の位置は、昭和55年度調査で検出された貼石を有する円形周溝墓の北約10mである。周溝内からは、第Ⅱ様式・第Ⅲ様式(古)の土器が多量に出土しているが、それ以降のものは存在しない。今回の土器群は、第Ⅲ様式(新)～第Ⅳ様式のものである。これらのことから、円形周溝墓築造当初は、その周溝内で祭祀を行ない、以後その周辺で祭祀を行なったとは考えられはしないだろうか。また、SK04～07などの土壠もそれに関連するのではないかだろうか。

### 土 器

弥生時代については、第Ⅰ様式(新)～第Ⅴ様式までのものが出土している。すべての土器について整理を終えていないが、その中で見通しを述べると、第Ⅱ様式の斐形土器にいわゆる逆L字形口縁部を有するものが数少ないと第Ⅲ(新)～第Ⅳ様式の紋様が当地方ではめずらしく多様であることがあげられる。

斐形土器の逆L字形口縁部は播磨的特徴としてあげられ、隣接する西播地方の楠・荒田町遺跡でもその影響のもとにかなりの率で出土している。また東播に属する加古川流域の東神吉遺跡、砂部遺跡等でもかなり目立った存在になっている。しかし、同じく東播に属する当遺跡では、ほとんどその姿をみること

はできず、如意形口縁部をもつ變形土器との比率は数パーセントを割るであろう。

それとともに、当遺跡では搬入品である紀伊産變形土器が目立った存在になっており、当遺跡の特異さがうかがえる。

第Ⅲ（新）～Ⅳ様式の紋様の多様さは、殊に脚台部の鹿描紋様の種類の豊富さに代表されるもので、これは山陽地方の影響を受けたものであろう。また、注口土器についても、当遺跡出土の2点、北方約0.5kmの今津遺跡出土の1点が存在し、先の脚台部の紋様とともに山陽地方とのつながりが色濃く見られる。

## 五 素

当地方における玉造り遺跡は、今日まで全く知られていなかったが、当報告の弥生時代玉造りと、当遺跡大日地点の古墳時代玉造りが確認され、今後の詳細な整理により、原材および製品の流通、製作工程が明らかにされるであろう。

今回出土した玉類は、第Ⅱ様式・第Ⅴ様式に属する住居址出土のものであるが、同一時期における製作工程の復元をし得るほどの量がなく、断片的資料をつなぎ合わせ考えると、原石の打ち割り → 面を整える粗い研磨 → すり切り施溝 → 四角柱に整える研磨 → 六～八角柱に研磨 → 両側からの穿孔 → 円柱に研磨となるであろう。

なお当遺跡大日地点における古墳時代玉造りにはすり切り施溝は認められていない。これはその石材の大部分が軟質の滑石であることに起因すると考えられる。

## 遺跡の盛衰

明石川流域の弥生遺跡は、吉田遺跡に源を発することは否定できない。当新方遺跡も前期中頃に吉田遺跡から分村されたものであろう。しかし、中期初頭には母村、子村の関係は逆転していたであろう。あるいは、前期末にはすでに今津遺跡などの子村を生み出すほどであったかもしれない。そして、第Ⅲ、Ⅳ様式期に最盛期を向え、貼石を有する円形周溝墓や極大な量の土器が供献された方形周溝墓を築造し得るほどに成長していた。また、第Ⅱ様式から玉造りといった特殊な生産を開始していることも中核集落としての余裕ではないか。

しかし、後期に入るとかけりが見えはじめる。遺構の密度は極度に粗になり遺物量も微量になる。と同時に吉田南遺跡といった大集落が突如出現し、内行花紋鏡を有する住居址まで存在している。今津、高津橋岡両遺跡の間にも同様の様相、関係が読みとれる。第Ⅳ様式における丘陵上の集落の多発と絶滅を生んだ異常事態が、平地の集落の盛衰にまで影響しているのであろう。

しかし、新方遺跡は廃絶したわけではない。第Ⅴ様式以降も一般的な集落よりもはるかに内容は豊かである。古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代いずれの時期の遺物も多く出土している。玉造りについても6世紀初頭まで確認されているし、奈良時代には墨書き土器も存在する。ただ、あまりにも大きな吉田南遺跡の出現により、それに付随する集落になってしまったのではないだろうか。

いすみ  
居住遺跡発掘調査概要

1984

神戸市教育委員会



## 例　　言

- 1 本書は、神戸市西区玉津町居住に所在する「居住遺跡」の発掘調査概要である。
- 2 今回の発掘調査は、神戸市西区玉津町居住字孫田92、93、94、95、96番地の一部において実施したものである。
- 3 発掘調査は、京阪神不動産の委託を受け、神戸市教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査期間は、昭和58年4月8日～同年5月26日である。
- 5 調査にあたり、京阪神不動産、大和ハウス工業の協力を得た。
- 6 発掘調査および本書の作成は、神戸市教育委員会文化財課学芸員 丸山潔が担当した。第V章については、谷正俊（立命館大学学生）が担当した。
- 7 出土遺物の整理にあたっては、橋本久和氏（高槻市教育委員会）の教示を得た。
- 8 補助員 田中耕司、古屋浩、整理員 大沼千野、中嶋三恵子、木下秀美。

## 本文目次

I はじめに	1
II 立地と環境	2
III 遺構	5
IV 遺物	8
V 居住遺跡における土器 陶磁器の組成について	13

## 挿図目次

図1 調査位置図	1
図2 付近の条里造構と調査位置	2
図3 掘立柱建物出土遺跡分布図	4
図4 トレンチおよび遺構配置図	5
図5 掘立柱建物配置図	6
図6 柱穴断面実測図	7
図7 SX01平面、断面実測図	7
図8 鉄製品実測図	9
図9 下駄実測図	9
図10 須恵器、土師器、弥生土器 実測図	11
図11 白磁、青磁、瓦実測図	12
表1 明石川流域における11~13世紀 の掘立柱建物出土遺跡	3
表2 出土遺物統計表	
~ 6	17
写真1 掘立柱建物群	7
写真2 須恵器、土師器	8
写真3 瓦 器	9
写真4 白磁碗	10
写真5 影青合子	10
写真6 青磁碗	10
写真7 下 駄	10

## I. はじめに

当居住遺跡は、第二神明道路築造時に発掘調査が実施され、弥生時代前期およびそれ以降の遺物を出土することで知られた。その後、三度の発掘調査が実施されたが、明確な遺構は検出されず、遺跡の性格はいまだに解明されないまま今日に至っている。

しかし、昭和57、58年度に当地区の北に隣接する田中遺跡で、土地区画整理事業に伴い兵庫県教育委員会が試掘調査を実施されたが、これまでに弥生時代前期から鎌倉時代にわたる頗著な遺構、遺物が確認されている。付近一帯は、今日の行政区画により居住地区、田中地区に分割されているが、遺跡としては同一のもので、今後の調査が期待される。

今回の発掘調査は、鉄骨造の倉庫建築に伴うもので、基本的に建築物の基礎部分のみにトレンチを設定し、遺構が検出された場合は、その規模、性格等を明確にするため、調査区の拡張をすることを前提として開始した。その結果、Ⅲトレンチで掘立柱群が検出されたため東西に拡張し、掘立柱建物5棟等を確認した。



図1 調査位置図(1/5,000)

## Ⅱ. 立地と環境

明石川下流域東岸の標高15m前後の沖積地に立地する。付近一帯は、明石郡条里と呼称される条里遺構が顕著に見られる。しかし、その成立時期については、未だ明らかにされておらず、当地域で検出される中世集落との関係も不明である。

当遺跡周辺における中世集落の実態は明らかではないが、表1の遺跡で掘立柱建物が確認されている。なお、これらのいずれもが限られた範囲の発掘調査であるため集落規模の判明しているものはない。ただ吉田南、出合の両遺跡は、大規模な調査が実施されたが調査団によるもので、その内容については未発表であり詳細は不明である。しかし、相当数の掘立柱建物群が検出されており、明石川流域における中世集落の中核と考えられる。

明石川流域における中世集落の特徴は、至近距離に存在する神出古窯址群一操業は11世紀後半から13世紀末と推定される—より供給される須恵器の片口鉢、塊など多量に出土し、土師器が極端に少ないとある。また、瓦器も基本的に出土せず、現段階では、新方・居住・小山、居住の3遺跡で知られるのみである。これらは、いずれも明石川下流域の遺跡で、和泉型と呼ばれているものを出土している。

(表1の遺跡番号は、図3の番号と対応する。)



図2 付近の条里遺構と調査位置 (1/25000)

番号	遺跡名	所在地	周		建物・規格	出土・遺物	出土地
			期	世			
1	神出南下	西区神出町南	○	○	3間×4間(1棟) 2間×2間(3棟)	須恵器・土師器・磁器	須恵器・土師器
2	黒田	西区平野町黒田	○	○	2間×3間(1棟) 2間×2間(1棟)	須恵器・土師器・磁器	須恵器・土師器・磁器
3	西戸田	西区平野町西戸田	○	○	2間×3間(1棟) 2間×2間(1棟)	須恵器・土師器・磁器	須恵器・土師器・磁器
4	芝崎	西区平野町芝崎	○	○	3間×2間(1棟)	須恵器・土師器・磁器	須恵器・土師器・磁器
5	福谷	西区伊賀谷町福谷	○	○	3間×4間(1棟) 2間×3間以上(2棟)	須恵器・土師器	須恵器・土師器
6	池谷	西区伊賀谷町池谷	○	○	2間×2間(1棟)	須恵器・土師器	須恵器・土師器
7	長谷	西区伊賀谷町長谷	○	○	2間×4間(2棟)	須恵器・土師器	須恵器・土師器
8	菅野	西区伊賀谷町菅野	○	○	4間×4間(1棟) 3間×3間(1棟) 2間×3間(2棟)	須恵器・土師器・瓦器・磁器・瓦	須恵器・土師器
9	賄住・小山	西区玉津町賄住・小山	○	○	2間×3間(2棟) 2間×2間(1棟) 2間×(不明)(2棟)	須恵器・土師器・瓦器・磁器・瓦	須恵器・土師器
10	賄住	西区玉津町賄住	○	○	2間×3間(2棟) 2間×2間(1棟)	須恵器・土師器・瓦器・磁器・瓦	須恵器・土師器
11	出合	西区平野町出合	○	○	3間×(不明)(1棟)	須恵器・土師器	須恵器・土師器
12	小寺	西区伊賀谷町小寺	○	○	2間×5間面附(1棟)	須恵器・土師器	須恵器・土師器
13	北別所	西区伊賀谷町別所	○	○	2間×5間面附(1棟)	須恵器・土師器	須恵器・土師器
14	高津櫛岡	西区玉津町高津櫛	○	○	2間×5間面附(1棟) 2間×2間(1棟) 2間(2棟)	須恵器・土師器・瓦器・磁器	須恵器・土師器
15	新方	西区伊賀谷町新方	○	○	2間×2間(1棟) 2間×(不明)(3棟)	須恵器・土師器・瓦器	須恵器・土師器
16	吉田南	西区轟友一丁目	○	○	須恵器・土師器・瓦器	須恵器・土師器	須恵器・土師器

表1 明石川流域における11~13世紀の掘立柱建物出土遺跡

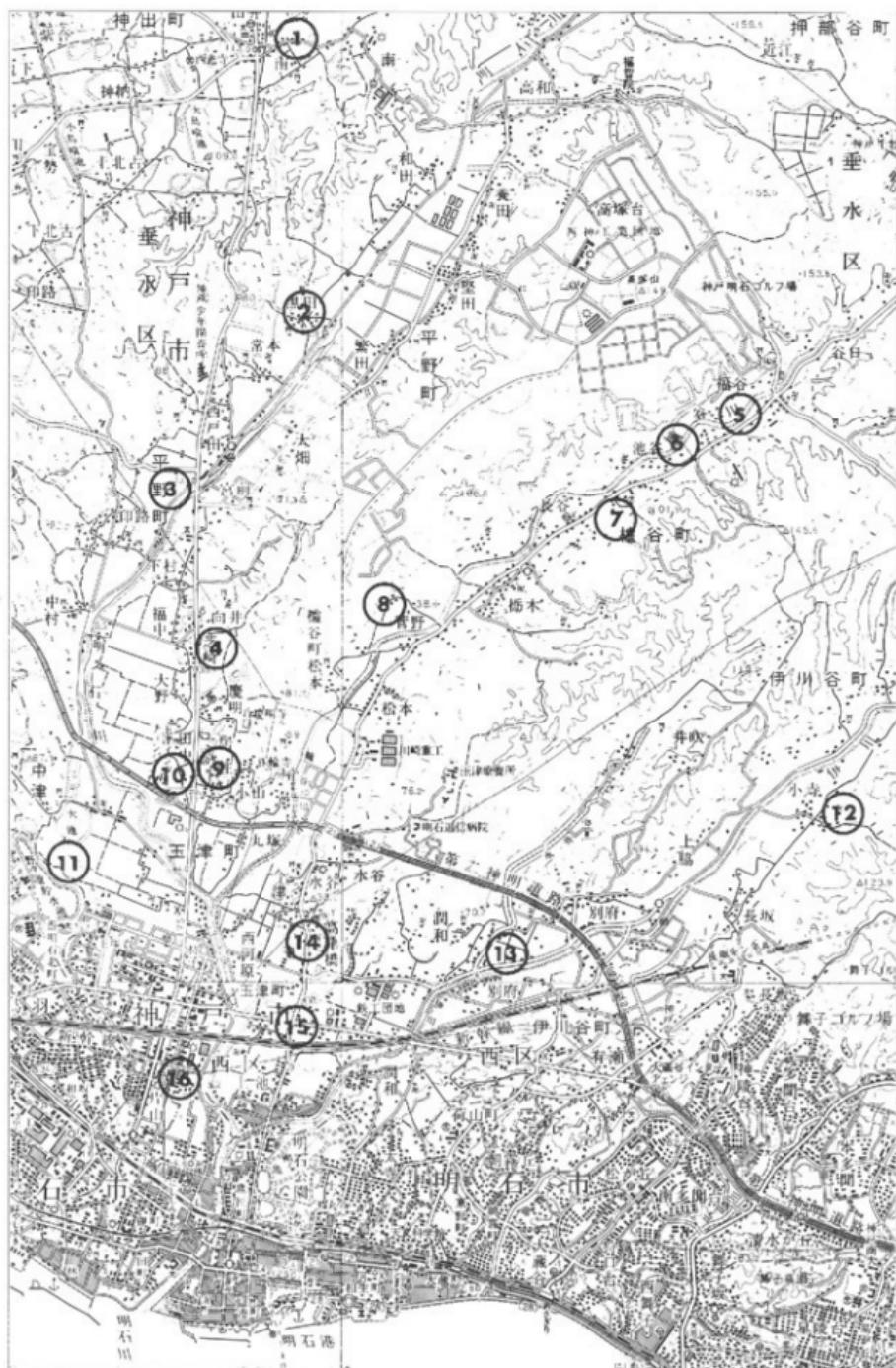


図3 掘立柱建物出土遺跡分布図(1/50000)

### III. 遺構

検出された遺構は、I～Vトレンチの北端に集中しており、掘立柱建物5棟、柵列1列、溝状遺構2条、土壌2である。VIトレンチの溝状遺構は、弥生時代第IV様式に属するが、他はすべて鎌倉時代前半（12世紀後半～13世紀初）に築造されたものである。

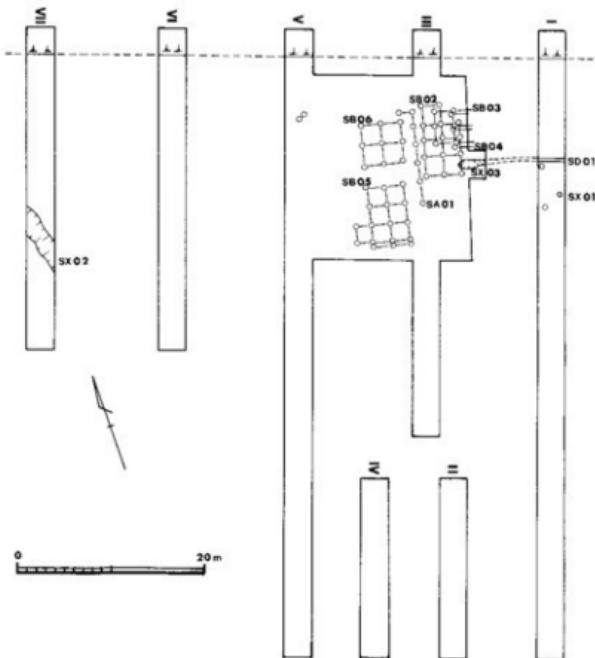


図4 トレンチおよび遺構配置図

- SB02** 柱行3間、梁行2間 ( $6.4 \times 4.2m$ ) の掘立柱の南北棟建物で総柱である。北西角に1間×1間の張り出し部を有する。
- SB03** 南北2間、東西1間以上の掘立柱建物で総柱であろう。
- SB04** 南北2間、東西1間以上の掘立柱建物である。
- SB05** 柱行3間、梁行2間 ( $6.2 \times 4.0m$ ) の掘立柱の南北棟建物で総柱である。南西角に1間×1間の張り出し部を有し、南辺には縁束を持つ。
- SA01** SB05、06およびSB02に伴うと考えられる柵列で、南北5間 ( $10.0m$ ) とそれに直角に西へ1間 ( $1.35m$ ) 存在する。日かくしへいと考えられる。

**SX01**  $0.47 \times 0.4m$  の楕円形プランの土壌上に丸瓦片、須恵器壺、10cm程度の礫等がかぶせられたものである。埋土は、炭、灰層で骨片等が含まれている可能性もあるため、すべて採取し水洗選別したが、遺物は全く含まれていなかった。

**SX02** 幅1.8m、深さ0.2~0.5mの溝状の造構で弥生土器片が出土している。

**SX03** SB02の東南角から東に向かってのびる土壙および溝で、SD01に接続すると考

えられる。

**柱掘形と柱** 掘形は、径0.2~0.4mの円形ないしは楕円形プランで、深さは0.25~0.5mである。SB02、05の張り出し部の掘形は他のものより小形で、径0.2m以下である。またSB05の縁束は0.1m前後と非常に小さい。

柱は、径0.1~0.15mで、すべて丸太で面取りされたものはない。また、柱材の残存するものの中には、先端を杭状に尖らせたもの（SB02-1）もある。

なお、SB06は廃棄時に柱を抜きとったものがあるらしく、SB06-5のように抜きとり後礫を投入しているものがある。

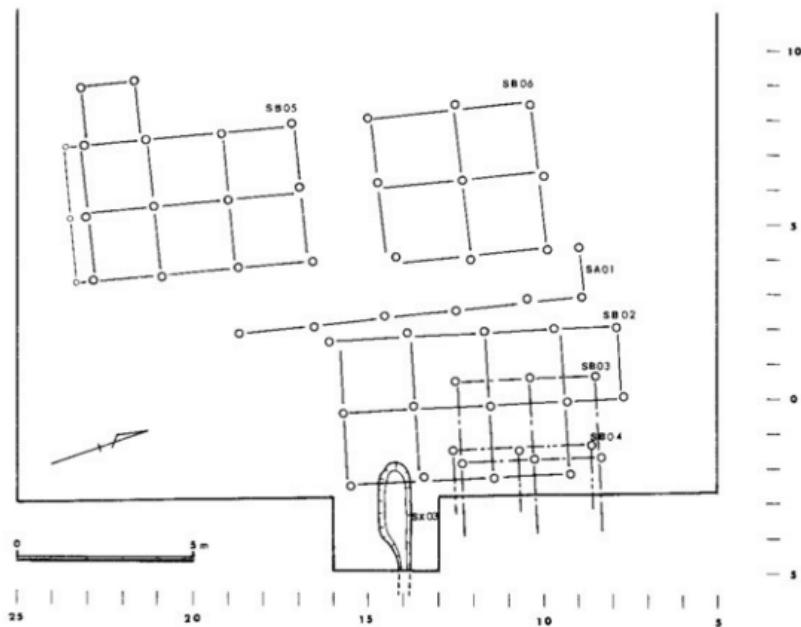
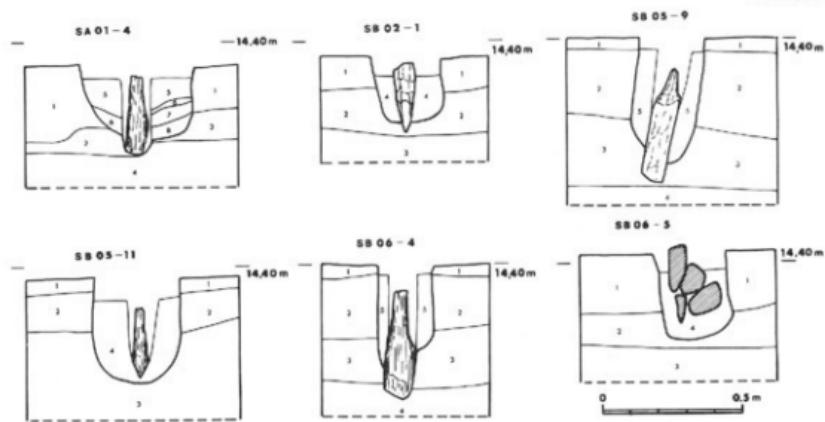


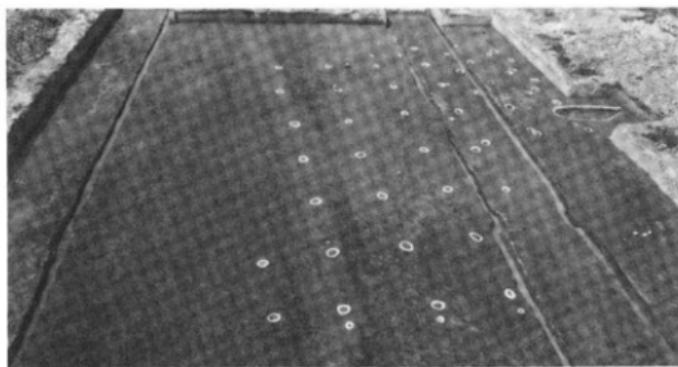
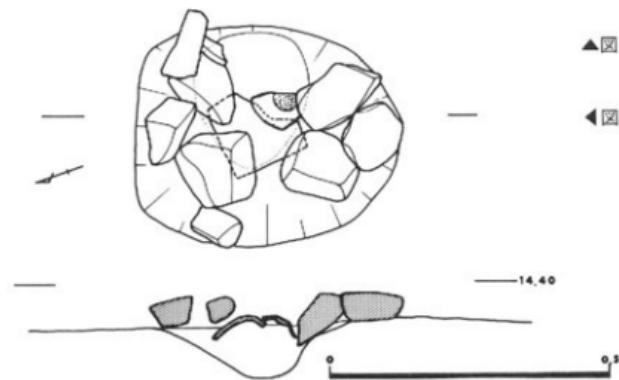
図5 掘立柱建物配置図

居住跡



▲図6 柱穴断面実測図

◀図7 SX01平面、断面  
実測図



## IV. 遺 跡

須恵器、土師器、瓦器、磁器、瓦、鉄製品、石製品等が出土している。これらの大部分は、掘立柱建物が存在する地区に集中して出土している。また、若干量ではあるが、弥生土器、石鎌、石斧が出土している。

- 鎌倉時代**
- 須恵器塊（4・5）：最も多く出土している遺物である。いずれも底部回転糸切りで、内外面ともロクロ回転による横ナデ調整が施されている。
  - 須恵器鉢（1～3）：片口鉢・捏鉢と称されるものである。口径30～35cmの一般的なもの（1・2）と20cm程度の小形のもの（3）がある。底部回転糸切りで内外面ともロクロ回転による横ナデ調整が施されている。
  - 須恵器小皿（6～8）：底部回転糸切りで、短いたち上りを有する。底部内面はナデ調整を、体部内外面は横ナデ調整を施す。
  - 土師器羽釜（9）：出土量が少なく、しかもほとんどが細片になっている。内面は横方向の刷毛目調整が、外表面は横ナデ調整が施されている。鍋の端面には四線様に強い横ナデが施されている。
  - 土師器小皿（10）：底部回転糸切りで、内外面とも横ナデ調整が施されている。手づくねの小皿は出土していない。
  - 瓦器塊（写真3）：30数点出土しており、須恵器を主体とする当地域としては出土量の多い部類に属する。図化し得るものはないが、すべて和泉型に属する。口縁部外表面のなでは二段に巡り、高台は断面三角形か指などで方形にしたものである。暗紋は内面のみで、太く粗く、大部分が平行するものである。わずかに格子や、螺旋のものが存在する。

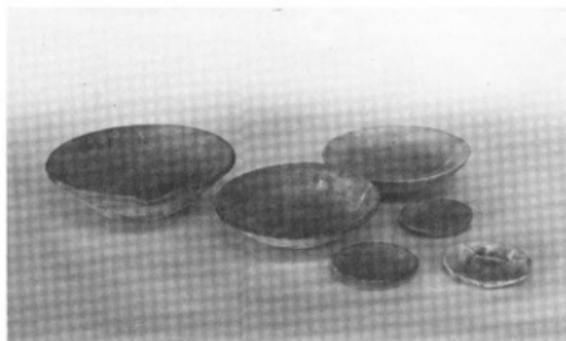


写真2　須恵器、土師器

**白磁碗 (15~19)**：口縁部を玉縁にするもので、外面下半および底部は施釉されていない。高台の削り出しは浅く、内面下半に沈線状の段を巡らす。横田賢次郎、森田勉氏分類（以下略）のⅣ類—1に属する。

**白磁碗 (20)**：外面は箆削り調整が施され、高台の削り出しは深く、下半および底部は施釉されていない。内面の口縁下および見込みに段を巡らす。見込みの段の内側の釉薬を幅1cm程度の輪状にカキ取っている。Ⅲ類—2に属し、釉薬は濁黄緑色を呈す。

**白磁皿 (21・22)**：いずれも削り出しの高台で、外面下半および底部は施釉されず、内面見込みの段の内側は輪状に釉薬がカキ取られている。Ⅲ類に属し、釉薬は青緑色を呈す。

**青磁皿 (23)**：同安窯系の製品と思われるもので、底部外面の釉薬がカキ取られている。内面には、箆および櫛で紋様が描かれている。I類—2に属する。

○ **影青合子 (24)**：蓋が2点出土している。

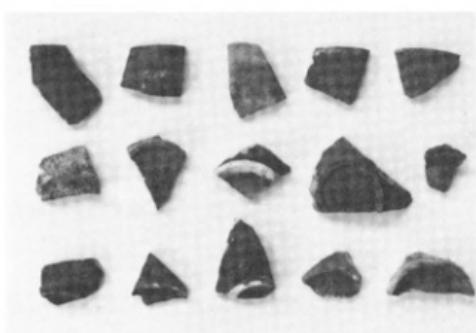
以上の他に、白磁碗V類、VI類、白磁皿VI類、Ⅲ類、Ⅳ類、白磁四耳壺、劃花文および蓮弁の龍泉窯系青磁碗・劃花文皿、影青皿等が出土している。

□ **瓦 (25・26)**：いずれも蓮華文軒丸瓦である。(25)は、神出古窯址群堂の前支群第4号窯出土のものに酷似する。

**鉄製品 (図8)**：長さ17.6cm、断面長方形で一端が尖る。基部より7.6cmの部分に3ヵ所のくぼみがある。用途は不明である。また鉄鍋と考えられるものが出土している。

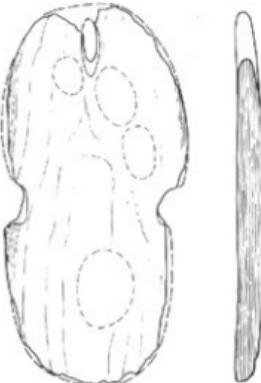
**石製品**：石鍋の底部が2個体分出土している。いずれも外面には著しい煤の付着が認められる。また小型の砥石も出土しているが、石材は不明である。

図8



▲写真3 瓦器

図9 下駄 (S = 1/2) ▶

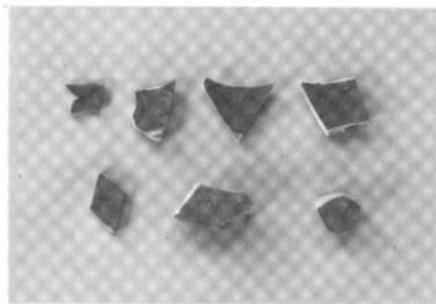
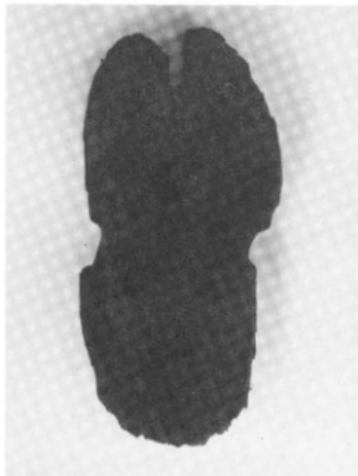
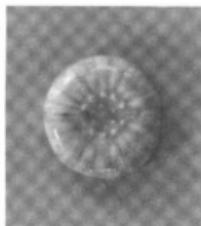


居住遺跡



◀写真4 白磁碗

▼写真5 影青合子



▲写真6 青磁碗

◀写真7 下 駄

古墳時代 須恵器杯が数点出土している。(13)は、それを代表するもので、6世紀前半に位置づけられるものである。

弥生時代 土器は(14)の他に頸部に凹線紋を巡らす壺形土器片、生駒西麓産の壺形土器片などが出土しているが、いずれも磨滅が著しい。生駒西麓産のものは第Ⅲ様式に、他は第Ⅳ様式に属する。

石器は、太形蛤刃石斧と石鎌が出土している。

土器・石器とともに当遺跡北西で確認されている田中遺跡からの流れ堆積と考えられる。

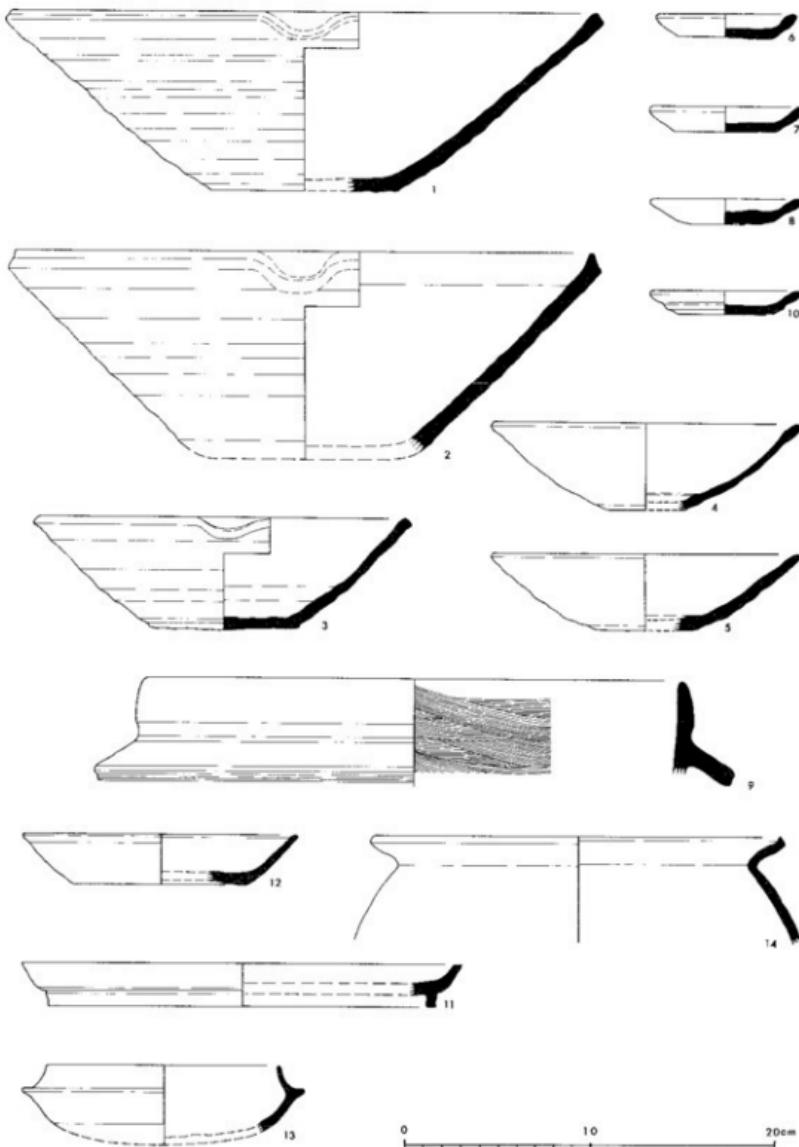


図10 須恵器、土器、弥生土器実側図（1～14）

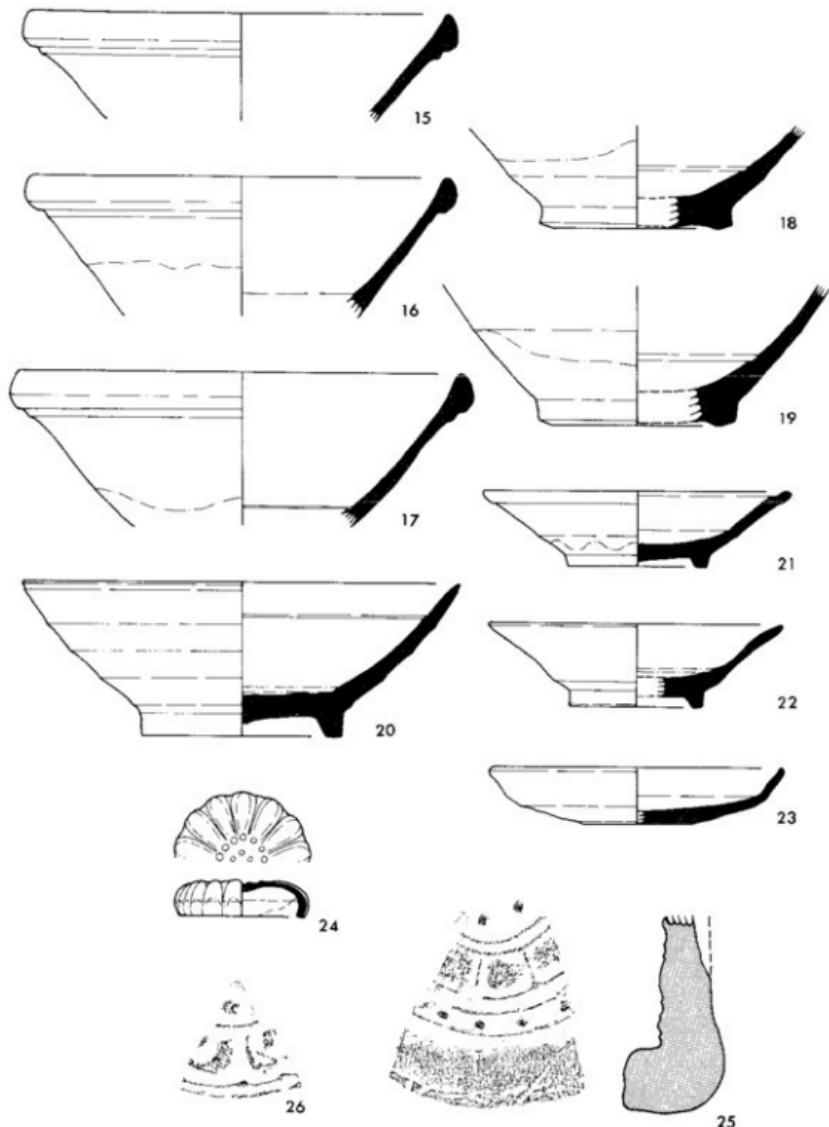


図11 白磁、青磁、瓦実測図 (15~26)

## V. 居住遺跡における土器・陶磁器の組成について

**1はじめに** 平安時代末から鎌倉時代にかけては、政治・経済体制に大きな変動がみられたが、それに対応するかの如く、国内土器生産も変革期を迎えていた。

東播磨においては、神出古窯址群・魚住古窯址群が出現し、従来の須恵器生産とは異なる壺・甕・鉢・小皿等の限定された器種の生産が行なわれた。また中国製陶磁器を中心とする輸入陶磁器が日本国内に広汎に流通し始めるのもこの時期からである。

この様な土器・陶磁器の生産・消費活動に新たな動きが認められるにもかかわらず、その具体的な様相は必ずしも明らかにはなっていない。そこで、神出・魚住古窯址群という東播系須恵器生産地に近接した本遺跡の土器・陶磁器の組成を示すことにより、明石川流域（東播磨）における中世土器の様相解明の基礎的考察としたい。

**2数量算定の方法** 土器・陶磁器の組成を明らかにするために、建物群の検出されたトレンチ（I・Vトレンチとその間の拡張区）の包含層内遺物（灰色粘土層）と造構内出土遺物を対象として数量算定を行なった。

遺物包含層は茶褐色粘質土と灰色粘土の二層に分かれる。茶褐色粘質土はローリングを受けた遺物が多く、弥生時代～中世までの遺物を包含した二次堆積層である。灰色粘土層は平安時代末～鎌倉時代の遺物を大量に含み、他時期の土器の混入は極めて少量である。また、灰色粘土層は殆どのトレンチで見られるが遺物の包含が多いのは建物の存在していた周辺だけであり、他の地区では出土量が極端に減少する。つまり、灰色粘土層の遺物は建物で生活した人々が使用し、周辺に廃棄したものであり、数量算定を行なう際の有効な資料となる。

算定の際には、破片を口縁部・胴部・底部に分類し、合計して総破片数を出したが、土師器の細片化が著しく、総破片数では種類別百分比を出す際に大きな誤差が生じるため、各土器の口縁の破片数で百分比を表わした。また、他の時期の土器が極く僅か混入していたが、これらは算定の際に除外した。

**3土器・陶磁** 土器・陶磁器の組成を表わしたのが17ページの表2～6までのグラフである。  
**器の組成** まず、種類別百分比（表2）をみると、須恵器が64.37%と過半を占め、次いで土師器が32.91%、瓦器と輸入陶磁器がそれぞれ1.5%程度である。須恵器の占める率が高いのは、本遺跡が東播系須恵器生産地に近接しているという地理的条件に大きく影響されているからである。しかし、須恵器生産地に近接しているにもかかわらず、土師器が全体の3分の1を占めることも注目すべき点である。

る。更に、本遺跡では輸入陶磁器が神戸市域の同時代の遺跡の中では比較的大量に出土しているが、種類別百分比に表わすと約1.3%と極めて小さな比率となり、遺跡内における輸入陶磁器の使用のされ方が今後の問題となる。

次に、各土器類の器種別百分比（表3）をみると、須恵器は壺が約90%を占め、鉢・皿・甕・壺類は10%程度である。土師器は皿類が90%以上であり、壺釜は極く僅かにすぎない。また、瓦器・輸入陶磁器も大半が碗・皿類である。この様に各土器・陶磁器類中で壺・皿類（供膳形態）の占める比率が高い。

具体的にこれを表わしたのが形態別百分比（表4）である。このグラフを見ると、供膳形態（壺・皿）が98.85%と圧倒的に多く、調理形態（鉢）は4.61%煮沸形態（鍋・釜）は1.18%、貯蔵形態は僅かに0.36%となり、供膳形態の多様性と量の多い点に注目すべきである。

更に、供膳形態の土器組成を壺・皿別に表わしたのが表4である。これによると、壺類では須恵器が96%とその殆どを占め、瓦器と輸入陶磁器は各々2%程度である。また、皿類は土師器の大皿・小皿が92%以上を占め、須恵器の小皿は6.5%、瓦器・輸入陶磁器の皿は1%に満たない。以上から、壺類は須恵器、皿類は土師器という機能分担が存在し、須恵器の小皿はこの機能分担に抑制されて、生産量は極めて低かったものと考えられる。<sup>12)</sup>

この様な関係の中にあって、瓦器壺・皿が少量ではあるが出土していることに注意すべきである。瓦器壺・皿は近畿地方では、大阪湾沿岸や淀川流域を中心に広く分布する土器であるが、東播系須恵器生産地に近接する本遺跡では須恵器、土師器がその機能を受けもっており、瓦器の商品としての流通は不利な条件下にある。それ故、瓦器自体に特殊な機能分担がなければ、この地域では受容され得ないのでなかろうか。しかし、本遺跡における瓦器の出土量は周辺の遺跡に比べて非常に多い様である。また、表1に見られる様に瓦器の出土する遺跡としない遺跡の相違は今後、検討すべき問題であろう。

#### 4 遺物から みた建物 の性格と 年代

掘立柱建物群はI・III・Vトレンチの間で検出され、他のトレンチでは全く検出されていないので、周辺に建物は存在せず、これらは一つの生活単位の集団が居住した建物群とみて差しつかえないであろう。建物群は柵SA01で東西に二分される。SB02～04は同じ場所で二度建て換えられており、その建物の機能が長期間継続したことが判かるので、建物群の中心的な建物（主屋）であったと考えられる。また、西側のSB05～06は柵の軸線と棟方向が一致するので、これらは同時に存在して主屋に付属する建物であったらしい。その中でSB05は他の建物とは異って南側に縁側状の施設が付いている。さらに付近の包含層から青磁香炉・白磁四耳壺等の遺物が出土しており、特殊な性格を持つ建物であろう。<sup>13)</sup>

次に、建物の年代について考察をしてみたい。須恵器捏鉢の口縁部肥厚の状態によって、年代を求めることがある程度可能である。建物址周辺の包含層出土の捏鉢をみると、12世紀後半～13世紀初頭のものが殆どであるが、柵より東の建物の重複している部分では、13世紀中頃～後半のものが出土していることから、柵より西の建物と東の建物の一部は12世紀後半～13世紀初頭ごろに建てられ、東の建物は二度建て換えて、13世紀の中頃～後半まで存在していたことが判かる。更に、輸入陶磁器の組成を年代決定の補助資料とすることができる。本遺跡では白磁が全体の約80%を占めており、特に白磁碗IV・V類の出土量が多い。青磁は同安窯系の皿、龍泉窯系の劃花文碗、蓮弁文碗が出土しているが、全体の13%弱と非常に少ない。九州の大宰府では、11世紀中葉～12世紀初頭は白磁の出土が殆どで、12世紀中葉から13世紀初頭には同安窯系青磁、龍泉窯系青磁の劃花文碗の比率が高く、13世紀中葉から蓮弁文の青磁碗が大部分を占めるという。本遺跡では、白磁碗IV・V類が主流を占めながら龍泉窯系の劃花文碗、蓮弁文碗が出土していることから、12世紀中頃～13世紀初頭に盛期を迎えるながら、13世紀中頃ぐらいまで存続していたことが判かり、須恵器捏鉢でみた年代観とほぼ一致する。

## 5まとめ

本遺跡の土器、陶磁器の組成を他地域の遺跡のものと比較することによって本章のまとめに代えたい。ここでは、淀川流域にある大阪府高槻市の宮田遺跡と西部播磨に位置する兵庫県竜野市の福田天神遺跡を比較の対象とする。

これらの遺跡の土器、陶磁器の種類別百分比を表わしたのが表6である。本遺跡では須恵器が全体の約60%を占めていたが、宮田遺跡では瓦器が全体の約60%、福田天神遺跡では土師器が約50%、須恵器が約40%となる。つまり、東播系須恵器生産地に近接する本遺跡では須恵器、畿内中心部の宮田遺跡では瓦器、西播磨の福田天神遺跡では須恵器と土師器がほぼ同率という様に過半数を占める土器が各地域で異っており、それらが在地の土器生産の状況に対応したものであることは明らかであろう。

次に宮田遺跡では、国産陶器（鉢・甕・壺）が若干出土しているのに対して本遺跡や福田天神遺跡では出土していない。これは、須恵器生産地に近く、優れた調理・貯蔵形態である須恵器の鉢・甕・壺が容易に入手できるため、他地域の国産陶器の流入が不可能であった結果である。

また、輸入陶磁器は本遺跡では1.28%、宮田遺跡（溝2-a区）では2.3%、福田天神遺跡（SD01）では2.65%となり、それらが出土土器中に占める比率は極めて低率であることが判かる。平安時代から鎌倉時代にかけては輸入陶磁器が広汎な流通を始める時期であるが、すべての人々が恒常に使用した什器でないことは、この比率から見ても明白である。

更に各遺跡で共通する点は、損耗率が高い煮沸形態の壺・釜類が本遺跡では1.18%(總破片数では7.73%)、宮田遺跡(溝2-a区)では6.71%、福田天神遺跡(SD01)では4.6%と意外に低いことが判かる。本遺跡では、滑石製の石鍋片が若干出土しており、耐久性のある石鍋や鉄鍋が我々の予想以上に普及していた可能性もあり、将来、検討すべき問題である。

以上、本遺跡の土器、陶磁器の組成を他地域の遺跡のものと比較して述べてきたが、明石川流域(東播磨)における中世土器の様相解明は未だ緒についたばかりであり、今後の資料の蓄積によって、より鮮明かつ具体的な姿を求めてゆきたい。

- 1 この他に瓦片57と石鍋片5、白磁四耳壺胴部2、青白磁胴部2、底部1が出土しているがグラフから除外した。
- 2 神出古窯址群中の釜ノ口支群で6基の窯が調査されたが、須恵器の皿を焼成するのは11世紀末の5号窯のみであった。また、調査担当者の言によれば、6基の窯のうち5分窯を除く他の12世紀末の窯では小皿を焼成するが、その生産量は極めて少量であるとのことであった。「神出古窯址群」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報1』神戸市教育委員会 1983
- 3 青磁香炉・白磁四耳壺は同じ輸入陶磁器の碗・皿に比べて出土量が少なく、広汎に使用されたものとは考え難い。つまり、これら特殊な用途の器を必要とするのは限定された人々であり、それは僧侶的な身分の人々に他ならない。ここでは『今昔物語』巻第15の「加賀國の僧尋寂住生の語」に登場する僧侶でありながら妻子を有して世俗で生活する様な人物が居住していた建物の可能性も考えられる。
- 4 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について 一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- 5 『第4回貿易陶磁研究集会発表資料』1983 鈴木重治、橋本久和「兵庫県福田天神遺跡」、橋本久和「大阪府高槻市上枚・宮田遺跡」の発表資料より作成した。
- 6 前掲資料の数値より算出した。

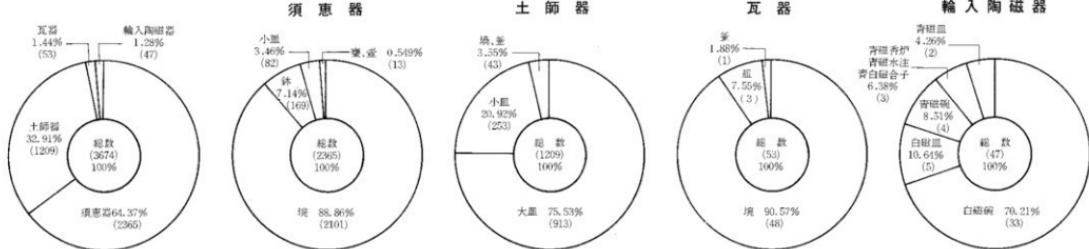


表2 種類別百分比(口縁部による)

表3 各土器、陶磁器類の基種別百分比(口縁部による)

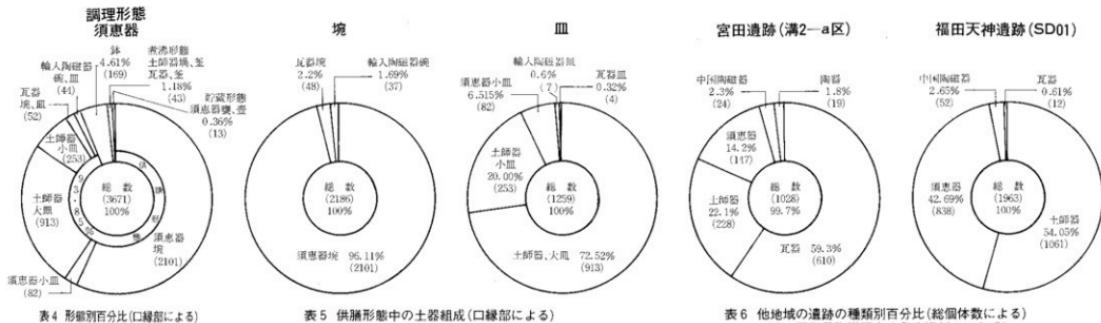


表4 形態別百分比(口縁部による)

表5 供膳形態中の土器組成(口縁部による)

表6 他地域の遺跡の種類別百分比(総個体数による)  
(第4回貿易陶磁研究会発表資料より作成)

## **新方遺跡発掘調査概要 居住遺跡発掘調査概要**

昭和59年3月25日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印刷 新生出版有限会社

神戸市中央区元町通4丁目2番26号